

福井県埋蔵文化財調査報告 第14集

下 屋 敷 遺 跡 堀 江 十 楽 遺 跡

県営竹田川右岸地区土地改良事業に伴う調査

1988. 3

昭和62年度

福井県教育庁埋蔵文化財センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第14集

下 屋 敷 遺 跡 堀 江 十 楽 遺 跡

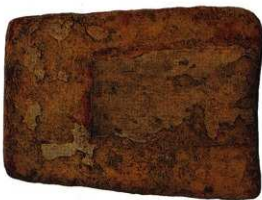
県営竹田川右岸地区土地改良事業に伴う調査

1988. 3

昭和62年度

福井県教育庁埋蔵文化財センター

卷頭圓版



序 文

福井平野の北部、金津町から三国町にかけての竹田川右岸地区は、日本海と最後までつながっていた潟湖を形成していたところでした。その潟湖と竹田川に面した自然堤防や微高地には多くの遺跡が立地しています。

昭和60年夏から開始された県営竹田川右岸地区土地改良事業の施工中に、下屋敷遺跡は偶然発見されました。施工途中という悪条件にも拘わらず、関係各位のご協力、ご努力により同年秋から昭和61年度まで足掛け2ヶ年に渡る発掘調査に着手することができました。下屋敷遺跡は、調査開始直後に出土した銅鐸鑄型とともに、大規模な玉作り集落として全国的にも注目される遺跡の一つとなりました。特に銅鐸鑄型の発見は、銅鐸鑄型分布圏最北端にあたる地での出土であるため日本古代史に大きな問題を提起することとなりましたが、その後の調査では銅鐸製作に関連する遺物、遺構などの発見はなく、問題を解決する糸口を得ることができなかったことは残念であります。しかし、玉作り関係では工房址の発見をはじめとして、管玉・勾玉とその未成品、玉錐・玉鋸などの工具類が多数出土し、弥生時代の玉作りを研究する上で貴重な資料を得ることができました。特に、遺構内の土をすべてふるいで水洗いしたことにより、通常では見落してしまうような微細遺物の検出が可能となり、大きな成果を得ることができたと言えます。

この報告は、調査成果のすべてではありませんが、広く埋蔵文化財の保護と普及に役立つとともに学術資料に供することができましたら幸いです。

おわりに、発掘調査から本書作成に際してご指導、ご協力いただきました関係各位の皆様ならびに地元の方々に対し厚くお礼申し上げます。

1988年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 藤 原 武 二

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、『県営竹田川右岸土地改良事業』に伴い、昭和60・61年に福井県坂井郡三国町加戸下屋敷、坂井郡芦原町堀江十楽で実施した下屋敷遺跡、堀江十楽遺跡の発掘調査報告である。なお、下屋敷遺跡に関しては紙面等の都合により、遺構・玉作り関係を中心として記載し、土器・石器については銅鐸鑄型と共伴したものに限定して記載し、その他についてはあらためて報告する予定である。
- 2 調査は、県教育庁埋蔵文化財調査センター主査山口 充が担当し、文化財調査員富山正明と実施した。
現地調査には、三国町郷土資料館「龍翔館」学芸員大井和峰をはじめ県教育庁埋蔵文化財調査センター赤澤徳明・調査補助員川村俊彦(現敦賀市教育委員会社会教育課文化財調査員)・丸岡町教育委員会社会教育課金元賢治・武生市教育委員会社会教育課西野吉幸・鯖江市郷土資料館魚谷鎮弘・今立町立歴史民俗資料館岩尾博之の補助を得た。
- 3 本書の執筆分担は、下屋敷遺跡第Ⅰ章 2(天井)、第Ⅰ章 1・第Ⅱ章 1(山口)、第Ⅱ～第Ⅴ章及び堀江十楽遺跡(富山)であり、編集は富山が行った。
- 4 図版及び挿図の作成は、主として富山が担当し山口が協力した。写真撮影は遺構を山口が遺物を富山が行い、巻頭カラーは荒川 明氏(写真家)にお願いした。
- 5 調査関係資料は、県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 6 石質同定は、福井県立博物館の東 洋一氏の教授を得た。
- 7 現地調査から本書作成に至る過程で、三国町教育委員会、三国町郷土資料館「龍翔館」、福井県坂井耕地事務所、竹田川右岸土地改良組合ならびに下記の方々のご協力を得た。

現地調査

下屋敷遺跡

稲田テル子 井上雅裕 岩城照治 大杉三幸 街道シゲ子 川畑菊枝 木内三郎 北畑喜義
木下きよえ 木下紀代子 木下沢子 木下孝子 木下卓子 木下 正 木下仁枝 木下直一
小玉徳子 米屋敏英 阪口秀宜 笹木信也 笹木正雄 椎川祐樹 鈴木美樹 高田 優
高橋 亘 川畑美智子 高地 香 高地房子 田中和弘 谷川幸子 土橋潤二郎 友田光子
中島よしの 中田二三子 中谷厚子 西 キミ子 西尾邦子 橋本寿雄 平島栄子 平島 樹
平島 実 堀江 聡 前田登美子 松浦静枝 松ドツユ子 萬道晴美 水上清子 宮本 滋
室野信子 森岡長子 柳原正江 山崎花子 山崎幸男 山本秀美

堀江十楽遺跡

岡藤信雄 川崎一彦 川崎儀右エ門 川崎邦子 川崎義典 川崎太徳 川崎 剛 川崎つや子
川崎津右エ門 川崎久枝 川崎ミチ子 川崎八重子

整理作業

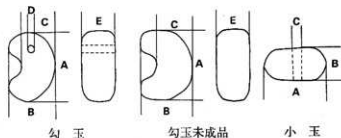
愛宕ますみ 五十嵐知子 石塚則子 伊豆倉浩美 小林明美 小林啓子 竹内順子 竹内ゆかり
田中康子 寺下輝美 富山恵美子 中野悦子 吉川みどり（敬称略 五十音順）

- 8 現地調査及び本書作成に当たって、下記の方々にご指導・ご教示を得た。

石川日出志 石黒立人 黒沢 浩 斎藤基生 佐原 真 西口陽一 橋本澄夫 久田正弘
福島正美 増山 仁（敬称略 五十音順）

凡 例

- 1 方位は磁北を示す。
- 2 遺構実測図の縮尺は、全体図： $1/300$ ，住居址（工房址）： $1/160$ ，土坑： $1/30$ ， $1/60$ である。
- 3 遺構実測図の水糸レベルは、1.5mである。（堀江十楽遺跡は2.0mである。）
- 4 遺物実測図の縮尺は、スケール参照のこと。
- 5 石器・石製品の計測値は、基本的には最大値を記しており、玉類の穴径は目に見える最大値を測定し、勾玉・小玉の計測値の表記は下記の通りである。



- 6 管玉・玉錐の欠損状態は、下記の基準で表記してある。

	a	b	c	d
1				
2				
3				

- a-1：円柱形で片端を完全に欠くもの
- 2： $\times$ 両端を完全に欠くもの
b-1：長軸方向で半分に割れ、両端を残すもの
- 2： $\times$ 片端を欠くもの
- 3： $\times$ 両端を欠くもの
c-1：両端を残し片方を一部欠くもの
- 2：両端を残し両方を一部欠くもの
- 3：片端を一部残し、もう一方は完全に欠くもの
d-1：円柱形で側面を一部欠くもの

巻 頭 図 版

序 文

例 言

凡 例

目 次

下屋敷遺跡

第I章 周辺の環境

1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2

第II章 調査経過

1 調査に至る経緯	5
2 昭和60年度の調査経過	5
3 昭和61年度の調査経過	8

第III章 遺構

1 住居址（工房址）	11
2 土坑	12
3 溝状遺構	28

第IV章 遺物

1 銅鐸鋳型	30
2 SD-001出土土器	30
3 SD-001出土石器	32
4 玉作り関係工具	33
5 有孔円盤状製品	35
6 玉類	44

第V章 総括

1 遺構について	53
2 土器について	54
3 銅鐸鋳型について	55
4 玉作り関係工具について	55
5 管玉製作工程について	57
6 結語	61

堀江十楽遺跡	77
--------------	----

挿 図 目 次

第1図	福井県における三国町の位置図	1
第2図	福井平野北部の丁田・水田・湿田区分図	2
第3図	周辺の遺跡	4
第4図	下屋敷遺跡調査区域図	6
第5図	住居址（土房址）実測図	11
第6図	S-306出土石槍実測図	12
第7図	遺構全体図	
第8図	S-105出土大型石甕実測図	16
第9図	S-220出土石鍬実測図	17
第10図	土坑実測図（1）	19
第11図	土坑実測図（2）	20
第12図	土坑実測図（3）	21
第13図	土坑実測図（4）	22
第14図	土坑実測図（5）	23
第15図	土坑実測図（6）	24
第16図	土坑実測図（7）	25
第17図	土坑実測図（8）	26
第18図	土坑実測図（9）	27
第19図	SD-001と銅鐸鑄型出土状況図	29
第20図	銅鐸鑄型実測図	31
第21図	楔状工具実測図	35
第22図	SD-001出土石器実測図	37
第23図	SD-001出土土器実測図（1）	38
第24図	SD-001出土土器実測図（2）	39
第25図	砥石実測図	40
第26図	石製円盤と土製円盤実測図	41
第27図	玉鐲実測図（1）	42
第28図	玉鐲実測図（2）	43
第29図	翡翠片と勾玉・小玉実測図	44
第30図	S-369出土管玉未完成品接合資料実測図	46
第31図	管玉未完成品（原石・第1工程品）実測図	48
第32図	管玉未完成品（第2工程品）実測図	49
第33図	管玉未完成品（第2工程品・第3工程品）実測図	50

第34図	管玉未成品(第3工程品)実測図	51
第35図	管玉未成品(第4～6工程品)、その他の管玉実測図	52
第36図	施溝分割順序例(S 369出土接合資料)	58
第37図	磨製玉錐先端形と出現率	59
第38図	磨製玉錐法量グラフ	59
第39図	管玉未成品(第3工程・角柱状未成品)法量グラフ	59
第40図	管玉未成品(第4,5工程・多角柱状未成品)法量グラフ	59
第41図	管玉法量グラフ	59
第42図	堀江十楽遺跡調査区域図	80
第43図	堀江十楽遺跡各区土層図	81

図 版 目 次

図版 1	(1)下屋敷遺跡全景 (2)下屋敷遺跡近景
図版 2	(1)住居址(玉作り工房址)全景 (2)柱穴・工作ビット
図版 3	(1)SD-001全景 (2)銅鐻鑄型出土状況
図版 4	遺構
図版 5	遺構
図版 6	遺構
図版 7	遺構
図版 8	SD-001出土土器(1)
図版 9	SD-001出土土器(2)
図版10	遺構出土石器
図版11	玉鐲
図版12	(1)砥石 (2)有孔円盤状製品
図版13	(1)管玉未成品(原石・第1工程品)(2)管玉未成品(第2工程品)
図版14	(1)管玉未成品(第3工程品) (2)管玉未成品(第4工程品)・円盤状チップ
図版15	(1)管玉未成品(第5工程品)・管玉その他の玉 (2)翡翠片と勾玉・小玉
図版16	管玉断面・模状工具
図版17	(1)玉錐 (2)打製玉錐
図版18	磨製石斧
図版19	(1)堀江十楽遺跡遠景(北から) (2)A区トレンチ (3)C区トレンチ
図版20	堀江十楽遺跡出土遺物

下 屋 敷 遺 跡

下屋敷遺跡

第I章 周辺の環境

1 地理的環境

下屋敷遺跡は、本州島の日本海側に面するほぼ中央のある福井県坂井郡三国町にある。

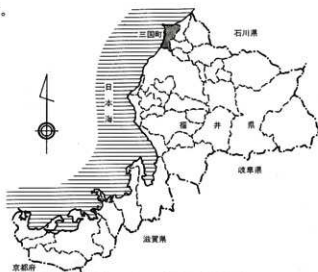
福井県は、北東から南西に細長く、北の石川県とは白山・加越山地を境とし、南東の岐阜県とは越美山地、南西の滋賀県と西の京都府とは、若丹の山地を境としている。

敦賀市東方にある木ノ芽山地は、敦賀湾に山麓を没入させている。この山嶺を境に嶺北と嶺南に地理的には大別される。嶺北地方は、降雪量が多い北陸型で、嶺南地方は、山陰型といえる。また、嶺南地方には、大きな河川や平野がなく、山地が海岸近くまで迫り、海と山にはさまれた狭小な平地が断続的に分布するのに対して、嶺北地方では、九頭竜川に合流する足羽川・日野川に代表される大きな河川と、その流域に形成された広大な沖積平野を有している。

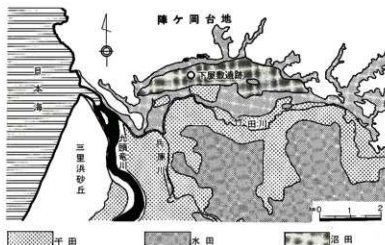
三国町は、嶺北地方の福井平野の北にあり、加越台地・三里浜砂丘・低地と海に地形区分が出来る。

台地は、町の北半にあり、石川県との県境になる加越台地の西端部一帯にあたって西と北が海に面している。三国町周辺で陣ヶ岡と呼ばれる加越台地の一部は、三国の旧町部がある河口に近い九頭竜川右岸に顕著な二段の海岸段丘面が見られる。高位段丘は、海拔80.8mを最高に海拔50～70mの段丘面をもち、第三紀層の基盤の上に砂礫層が薄くのっている。低位段丘は、海拔20～40mの段丘面を持ち、洪積層の厚い芦原砂層で形成されている。これらは、遺跡に近い砂の採取場の高さ20m近くある断面の観察でも内湾浅海成の細粒砂層、沿岸三角州成の粗粒砂層、風成の中粒砂層と堆積してきて陸化したことを示していた。

三里浜の砂丘は、三国町の南半の西側にあって西に面する日本海と東の福井平野の低地に挟まれている。砂丘は、その名のとおり南北に三里(12km)ほどの長さの海岸線を持ち、幅2kmほどである。北端は、丹生山地に連続しており、南端が陣ヶ岡と接続する地点を九頭竜川で分断されている。砂丘は、福井平野と日本海を分断する自然の形成した堤防となっている。この砂丘の構造は、東に広がる低地の下層を形成する中部泥層



第1図 福井県における三国町の位置図



第2図 福井平野北部の干・湿・水田区分図

上に堆積した上下の二層の砂で成立している。下の砂層は中部砂層、上の砂層が上部砂層とに分かれている。さらに上部砂層は中間に薄い黒砂層をはさんでおり、黒砂の下層の田砂丘を基盤として、黒砂の上層の新砂丘が一面に覆っている。この黒砂層付近では、古墳時代から平安時代にわたる土

師器・製塩土器等の遺物が出土しており、新砂丘の年代を明らかにしている。

陣ヶ岡台地と三里浜砂丘にかこまれた低地は、三国町の南半の東側にあり、広い坂井郡の水田地帯の北西部を占めている。

福井平野の一部を形成するこの低地は、三里浜を形成する上部砂丘の田砂層上に堆積した丸頭竜川とそこに流入する諸河川が運搬した土砂で覆われている。この低地を流れる河川は多くあり、遺跡の南を流れる竹田川もその一つである。竹田川は、白山山地の前面にある福井県坂井郡丸岡町の浄法寺山・丈鏡山と石川県江沼郡山中町の富士写ヶ岳・火燈山の間にはさまれた谷水を集めて西へ向かい、深い溪谷を縫うようにして丸岡町山久保付近で低地に入る。それからさらに北へ向かって坂井郡金津町の市街地を通過し、再び西へ向かって三国町で、丸頭竜川に合流して日本海に至る。竹田川が低地を流れる間に、山地を侵食した土砂を運搬して両岸に堆積し、両岸に自然堤防を形成している。陣ヶ岡台地と竹田川にはさまれた低地は、福井平野の中でも最も低湿な一帯である。昭和23年の干田・水田・沼田の分布状態を見ると沼田は、陣ヶ岡台地の直下のわずかな水田をはさんでゆるい弧状を呈して東西にほぼ6km・南北の巾が1kmほど長く延びていた。その周囲には水田があり、南側は幅が広がっている。その南には竹田川の両岸に自然堤防と、河川の搬入した土砂の上に干田がある。

ここに見られた沼田は、陸化する福井平野の中では最後まで水中に没していた地域で潟湖であった名残りである。

また、沼田の中に小規模であるが東西に長い水田が見られる。この水田は、東西に流れた河川の陸化が進んだ時期に自然堤防状に泥層を侵食した残りが痕跡をとどめているのであろう。

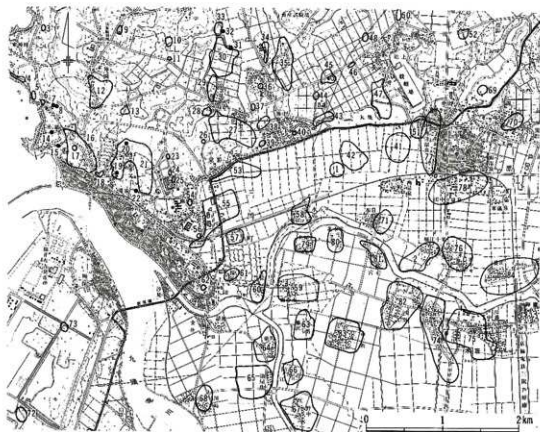
2 歴史的環境

低地・砂丘・台地と複雑な地形を持つ三国町であるが、現在のような地形になるまでには長い年月を経過している。県内では最古の遺跡である旧石器時代の遺跡が近年になって三国町で三ヶ

所、永平寺町内に一ヶ所発見された。これまで旧石器時代の人々の存在が確認されなかった地域での発見は丹念な分布調査の成果といえる。この時期の遺跡の分布状態は、陣ヶ岡台地の低位段丘の海岸沿いに雄島遺跡、西下向遺跡とやや離れた馬コロボシ遺跡がある。西下向遺跡は、旧石器時代としては県内で唯一の発掘調査の例で、昭和57年度に行った2度のわたる発掘の結果「旧石器時代後期（ナイフ形石器文化期）の瀬戸内系石器群に属する輝石安山岩製石器類の集中箇所を把握することができた。これらの石器類から知られる剥片生産技術は、竜翼状剥片の多産する横剃ぎ技法であり、翼状剥片を連続生産する瀬戸内技法とは異なることから、新たに三国技法と命名することに調査団はしている。

縄文時代になると遺跡数は増加するが、陣ヶ岡台地になお居住し続けており、低地に住居域を移すことはなかった。草創期の所産と思われる有舌尖頭器は、珥石で二段に築成された方墳であった姥ヶ谷古墳の封土中から単独で出土した。早期に属するものは未発見で前期の前葉になってから海蝕洞の聖り穴遺跡があり、中期の初頭までの土器がある。前期の中葉には、安島白崎遺跡があり、後期の前葉まで続いている。中期になると前記の遺跡に加えて北杉谷貝塚が中期の初頭から中葉まであり、他に藻取浜遺跡、嵩北遺跡がある。晩期と思われるものには海蝕洞の弁慶のヌケ穴がある。また、台地の南端の低地を見下ろす緑辺には、三国町北杉谷貝塚・芦原町舟津貝塚・井江霞貝塚が共通の立地であり、貝塚が形成された当時の地形を想定させる。舟津貝塚は、中期の中・後葉と後期の前葉までの土器があり、井江霞貝塚でも中期初頭から後期前葉までであった。これらの貝塚に遺された貝は、ヤマトシジミを中心にした気水性の貝類で、海と連結した広い潟湖を見下ろす台地上に貝塚を遺した人々の住居があったと見るべきであろう。

そして、低地の陸化は進み、農業生産を生活基盤とした弥生時代に入ると、低地に水稻の耕作地を求めて進出し始めた。竹田川兩岸の低地における弥生時代の遺跡は、竹田川の右岸にある芦原町番田遺跡が最古の例で、京福電鉄三芦線の敷設中に多数の遺物が出土し、現在でもその資料が実見出来る例としては最初の発見であった。縄文時代前期からの遺物を出土する前記の聖り穴遺跡も弥生時代中期後葉と後期の遺物を出土している。その後、近年になるまで増加することはなかったが、今回の調査の発端となった竹田川右岸での圃場整備事業の予定地内とその周辺からの発見が相次いだ。それは芦原町田中々・堀江十楽、三国町加戸・水居等からで、竹田川右岸の自然堤防上に殆どが立地していた。弥生時代も終末に近付くと再び陣ヶ岡台地の緑辺に住居を構えるようになり、低地にも続けて居住し続けている。本遺跡の立地する地点の西3.6kmの陣ヶ岡台地で銅鐸が出土している。出土地は、三国町米ヶ脇で現在ですでに廃線になっているが、昭和の始め三芦線の敷設工事中に総高42.2cm、鐸身高28cm、総重量5.5kgの四区装架棒文銅鐸が出土している。この銅鐸は、外縁紐2式で日本海側で発見された最北端の例である。その後、古墳時代の住居域でも同様の立地を示していた。



第3図 周辺の遺跡

- 1 下屋敷遺跡・2 堀江十楽遺跡・3 安島松外遺跡・4 藤取浜遺跡・5 西下向遺跡・6 米ヶ脇三敷遺跡・
 7 米ヶ脇上埜2号墳・8 米ヶ脇上埜1号墳・9 崎入谷遺跡・10 陣ヶ岡新聞遺跡・11 陣ヶ岡馬コロバシ遺跡・
 12 陣ヶ岡遺跡・13 陣ヶ岡米森遺跡・14 マッサの塚古墳・15 かも塚古墳・16 宿遺跡・17 米ヶ脇遺跡・
 18 宿東遺跡・19 薬師塚古墳・20 うばが谷古墳・21 滝谷遺跡・22 いなり山古墳・23 運動公園1丁目遺跡・
 24 緑ヶ丘A遺跡・25 緑ヶ丘B遺跡・26 金葉原遺跡・27 西谷遺跡・28 御成山城跡・29 嵩西遺跡・30 嵩遺跡・
 31 丸山古墳・32 腰前古墳・33 嵩北遺跡・34 平山北遺跡・35 平山農場遺跡・36 平山中遺跡・37 平山南遺跡・
 38 加戸A遺跡・39 加戸A遺跡・40 加戸本流院遺跡・41 舟津B遺跡・42 加戸E遺跡・43 杓子谷遺跡・
 44 加戸C遺跡・45 加戸B遺跡・46 加戸D遺跡・47 池上A遺跡・48 池上C遺跡・49 池上B遺跡・
 50 池上玉屋敷遺跡・51 舟津貝塚・52 城ヶ原南遺跡・53 覚菩提遺跡・54 妙見宮遺跡・55 覚善南遺跡・
 56 北杉谷貝塚・57 三国東A遺跡・58 水居遺跡・59 西今市遺跡・60 竹松遺跡・61 三国東B遺跡・
 62 二国神社遺跡・63 藤沢遺跡・64 栗門遺跡・65 油屋遺跡・66 玉ノ江遺跡・67 野中遺跡・68 川崎遺跡・
 69 二面A遺跡・70 国影遺跡・71 布日遺跡・72 黒川B遺跡・73 下野遺跡・74 本庄下番遺跡・
 75 本庄中番遺跡・76 田中々遺跡・77 舟津A遺跡・78 田中々温泉遺跡・79 角尾遺跡・80 北本堂遺跡・
 81 宮前遺跡・82 河間遺跡・83 中ノ浜遺跡・84 番田遺跡

第Ⅱ章 調査経過

1 調査に至る経緯

福井県の北に広がる福井平野は、県内有数の穀倉地帯である。その北西部を流れる一級河川竹田川は、東から西へ下り、九頭竜川と合流して日本海に注いでいる。竹田川右岸の三国町・芦原町にまたがる337.7ha（付帯受益24.5ha）の水田地帯で圃場の大区画化・排水路整備等を行い、大型の農業機械が導入できる圃場として農地の集約化の促進を図り、農業生産性の向上と農業経営の安定を目的として、昭和57年度から「県営竹田川右岸土地改良事業（圃場整備事業）」が開始された。この事業の終了は昭和62年を目標としている。

下屋敷遺跡の発見は、昭和60年9月2日であった。前記事業の昭和60年度・第6号工事施工中に重機の運転手が耕作土を除去して、三国町加戸字下屋敷一帯で弥生式土器を発見したことによる。発見された遺物は、発見者から同日中に三国町教育委員会にとどけられ、翌日には三国町教育委員会職員が発見場所を確認した。三国町教育委員会は、9月5日付で発見者から提出された遺物発見届を福井県に送達した。又、本遺跡が圃場整備事業の施工中に発見されたために、9月7日に三国町教育委員会と三国町土地改良合同事務所が遺跡の今後の取り扱いを協議して、工事を一時中断し、その間に遺跡の範囲と性格を明確にすることを相互で確認した。三国町教育委員会は遺跡発見届の提出とともに早急な現地における調査を福井県に要望した。

これを受けて福井県教育委員会は、9月17日にの福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの文化財調査員を現地に派遣し、遺跡の性格と範囲の調査を実施した。遺跡からは、玉作り関係遺物・弥生式土器等を多数採集し、玉作りに伴う集落であることを確認した。工事を中断した状況は、すでに耕作土が削り取られていた地点に多数の遺構が露呈し、遺物が周囲約3万平方メートルにわたって散乱していた。この結果を踏まえて福井県教育庁文化課は、福井県農地整備課と協議し、工事を再開する前に調査を実施すべき旨を伝えた。9月20日に福井県文化課・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター・三国町社会教育課・福井県坂井耕地事務所・三国町農林水産課・三国町土地改良合同事務所・竹田川右岸土地改良組合の関係地元役員等が協議し、その結果、調査が、米春の作付けまでに終了することを条件に合意した。福井県教育庁埋蔵文化財調査センターはこれに基づいて調査開始を決定し、昭和60年10月11日から現地作業に入るようになった。工事施工中の発見とは言え広大な範囲の調査を強いられながらもかかわらず、合意せざるをえなかった福井県教育庁埋蔵文化財調査センター及び福井県教育庁文化課の置かれている状況は、大いに反省すべきであろう。

2 昭和60年度の調査経過

調査は、昭和60年10月11日から開始した発見から2ヶ月弱を経過してからのことであり、雪の多い北陸の冬に向かったの調査開始であった。

調査予定地域は広く、10,000㎡ほどを予定したが、工事行程の関係から三国町と芦原町を直線で結ぶ東西方向の幅の広い農道と北からの農業排水を集める南北方向の排水路を優先的に敷設しなければならなかったために、その予定地を発掘においても優先させた。

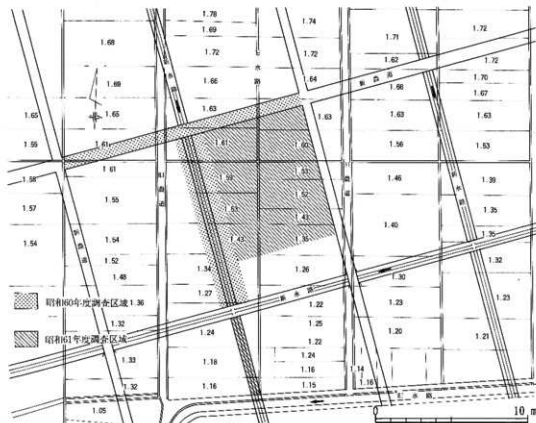
遺跡は、工事中に発見されたため、すでに遺構面直上まで重機による掘削が達している部分が大きく広がっていたが、水稻耕作時の状態をそのまま遺す部分もあった。そこでは厚さ20cmほどの耕作土の直下に多くの遺構が検出される遺構面がある。耕作土中には多くの遺物が混在しており、耕作時にも遺構面まで刮平されていたことを示していた。

10月11日からの現地作業は、期限の限られた調査であるため、遺構が検出される面の直上までの耕作土を重機で除去することにして、注意深く開始した。

10月14日からは、地元の作業員を導入して重機で除去しきれなかった遺構面直上のわずかに残る耕作土の除去を始めた。重機による作業は、これと並行して続行した。耕作土中には多くの遺物が包含されており、主に弥生時代中期の上器片が占めていたが、江戸時代前期の遺物も目立った。

発掘予定地内には将来にわたって遺跡の位置を確認出来るように、工事完成後の圃場の方位と同方向に10×10mのグリッドを設定した。また、南東の杭をグリッド名とした。

降雨量の多い季節を目前にした開始であることを予想して、10×10mのグリッドの四辺に沿わ



第4図 下屋敷遺跡調査区域図

せて幅30mほどの排水用の溝を全面に掘り、排水を容易にすることに務めた。この排水路の掘削は、遺跡の範囲を知ることにもなった。

人力で遺構を検出していく過程で遺構の掘り下げは、極力避けて調査を進めることにして、遺構を良好な状態に保存し、実測、撮影を行うようにした。

しかし、一部の地点では遺構の掘り下げも必要となった。

10月22日までに、調査予定地内の北側の農道敷内をほぼ耕作上だけ除去した結果、農道と並行して北側半分から北に広がるビート層が確認された。このビート層は遺構検出面が北に向かって緩やかに下降する面上に堆積して、陣ヶ岡台地の直下まで続いていた。この幅広いビート層は、東西に非常に長くある旧河道か潟湖であったことを推定させる。遺構検出面がビート層の下に落ち込む肩口には、ビート層中に多量の土器片と伴に石器が露出し始めた。この湿地帯には遺構面を南北に走る溝が連結していた。

10月23日から湿地帯とそこに連結していた溝の埋没土の掘り下げを開始した。この掘り下げ作業では、湿地帯の肩口から極めて多量の弥生時代中期中葉の土器が完全な形を推定し得るほどの状態で出土した。これらの土器は、ビート層中の最下面を中心に集中しており、この層はビート層と基盤層の砂混じり白色粘土が混じり込んだ状態であった。落ち込みに連結していた溝においても溝底付近の基盤層の直上には一団が押し潰されたような状態の数個体が発見された。しかし、溝中の埋没土にはビート層がなく、黒灰色土が入っていた。

10月25日には、この溝の埋没土と湿地帯の埋没土を掘り下げていく過程で湿地帯から8mほど離れた溝底から石製の銅鐸鑄型が内側を上にもけた状態で出土した。この周囲にも弥生時代中期中葉の土器が伴出しており、鑄型の遺棄された時期を推定する好資料を得た。

この鑄型は外型の片方で、表面の風化が激しく、表面の剥落が甚だしかったが、全体像は良く遺存していた。

この発見の後、引き続いて溝の延長を掘り下げていった。この溝はやや東よりに曲がって南に延び、溝底を中心に土器を多く出土するとともに、鑄型と同種の平滑な面をもつ凝灰質砂岩の石片や、玉作りの石核となる珪質緑色凝灰岩の角礫も出土している。

11月上旬までは、湿地帯と遺構とを天候に合わせて発掘を進めてきたが湿地帯の掘り下げ作業が遅れたために、排水を強化して全員であたった。湿地帯は、肩口から緩やかに下降するものの2～3m離れた付近からはほぼ平坦な底が北に向かって続き、深さが確認面からは50～60cmほどであった。この湿地帯は、上に純ビート層・下に砂混じりの粘土を含むビート層があって底面は砂が僅かに混じる白褐色粘土であった。この湿地帯を掘り進むうちに天候が悪化し、積雪のために調査を断念したのが12月14日であった。

この期間、銅鐸の鑄型の他に多量の遺物が出土し、その主なものは玉作りの材料となる翡翠、珪質緑色凝灰岩とその工具、石鏃などの石器と土器などであった。

翌昭和61年は、例年雪の少ない海岸に近い三國が大きな被害を出した豪雪の年となり、まだ雪深い3月ではあったが、田植えに間に合うようにするためやむなく調査を再開した。雪の下に埋も

れた遺跡を出すため排水ポンプで汲み上げた水で消雪し、地表面をだした。地権者には事情を説明して協力を求め昭和61年の作付けを中止するようにお願いしたところ遺跡の重要性を理解していただき了承していただいたので、周囲の圃場の耕作に必要な排水路、農道の予定地を早急に終了しなければならなかった。昨年12月に途中断念した北側の湿地帯とその肩口を精査することにより全力を上げ、年度内に農道と排水路の両側30m幅を終了することができた。

湿地帯には、肩口（岸辺）と直交するように直径30cm内外の木とそれに直交し肩口とは平行するように同様の木が出上し、直立したものもあった。あたかも船着き場のような状態であった。しかし、木が交差する交点にはそれらを連結したような痕跡は見られず、断定するには同様の施設を有する例の増加を待つことになろう。これらの木材群の間から2艘分の刳舟（丸木舟）が出上した。1艘は船先と艀の両端を欠いており、もう1艘は船先と艀の部分だけが出上し、外面の底部がいずれも焼け焦げていた。これらは別個体であった。

排水路・農道を終了して昭和60年度分の工事予定地を明け渡したのは4月であった。

3 昭和61年度の調査経過

昭和61年度の発掘面積は、約8000㎡を対象とし、それらは協議の結果作付けを中止した圃場である。前年度の継続ではあるが、積雪と湧水に悩まされることは少なく4月22日には開始した。

昭和60年度の調査によって、本遺跡が玉作り遺跡であることが確認され、多量の玉類及び工具類の出土が予想されたため、本年度は掘り上げた土は基本的にすべて洗うことにした。そこでまず、昭和60年度調査時に掘り上げた北側湿地帯の上を洗うことから調査を開始した。

5月12日から現場作業に着手したのだが、昭和60年度分の工事による排水を除去することから始めなくてはならなかった。本年度調査区内には工事の手を入れないように業者をお願いしていたのだが、土堤を造る際に西側の一部が重機により削平されてしまい、遺構の一部が破壊されてしまったのは残念なことであった。

6月2日より調査区東側から遺構確認を開始した。包含層は残存していないのだが、確認面である砂質粘土層上面がかなり攪乱されているためほぼ全面から多量の遺物が出土し、プランを確認するためには、砂質粘土層まで完全に下げる必要があった。しかし、遺物の散布は調査区北半分に集中し、遺構もほぼ同様の傾向が見られたため、南側は1区までを一つの区切りとして北側から調査を進めることにした。

6月19日より、調査区北東隅から遺構の掘下げを開始した。セクションベルト・遺物は基本的に残し、各遺構には昭和60年度からの通し番号を与え、掘り上げた土は遺構番号ごとに置き置き、悪天候等の理由により現場作業が困難な場合に洗うことにした。ちょうど梅雨に入ったところであったが、雨の日は心配していたほど多くはなかったものの、一度降ると水はけが極めて悪く、さらに深さ40cm以上の遺構は水が底から湧き出するため、天候が回復した後も1～2日現場作業ができないことがしばしばあった。しかし、土洗いがこの機を利用して進めることが出来たため土が必要以上にたまらずにすんだ。

7月10日から5日間で、それまで1区の南側に捨てていた排土を重機によりすべて南端に寄せ、1区以南の遺構確認作業を開始した。

7月31日、測量杭の打ち直しを行った。西側の杭は重機によりほとんど使いものにならない状態になっていた上、南側の杭を補充する必要があったからである。

8月7日から計10日間、他の遺構と並行して昭和60年度に銅鐸鑄型を出土した溝の延長部分を調査した。溝の断面形はU字形で、最深部は確認面から約30cmを測り、確認面から15～20cm下付近からは、土器を中心に多量の遺物が固まって出土した。しかしながら、銅鐸鑄型に関係するものは確認できなかった。この溝は南北方向から東方向へ向きを変えながら調査区を横断するものと予想されたのだが、徐々に浅くなりながら東へ約15m延びたところで自然に消滅していた。その延長部分を確認することはできなかったが、遺構が溝及びその延長部分の内側にほぼ入ることから環濠の一部と考えられる。

梅雨明け後9月上旬までは、夏らしいカラカラ天気が続き粘土質で硬くなった土に掘り下げも遺構確認作業も困難となったため、用水路をせき止めポンプで水を汲み上げ調査区に撒きながらどうか作業を進めることができた。

9月4日からは、当初より玉作り関係の遺物が集中して見られ玉作り工房址の可能性が特に高いと考えられた東端の地区に着手した。竪穴式住居のプランは明確にできなかったが、柱痕を残した柱穴群を土坑群が円く取り囲む姿が確認できた。これらの土坑群には、玉作りの各段階の遺物が偏って入っている傾向が一部に認められ、製作過程での各作業が場所を限定して行われていた可能性がある。

9月25日までに遺構掘り下げを終了し、翌26日より遺構断面の実測を開始した。実測が終了した遺構からベルトを外し、29日からは並行して遺構平面の写真撮影を開始した。10月は、例年に比べ気温が低く天候も悪い日が多く、断面実測が11月5日に、写真撮影が9日ようやく終了することができた。並行してそれまでに溜まった遺構の土を洗った。平面実測は調査区全体に1mメッシュを組み、11月11日から始め、途中魚谷、岩尾、金元各氏の協力も得て、11月18日までに平面実測・レベリングを終え、翌19日に航空写真撮影を行い現場作業を終了した。

途中、並行して行っていた土洗い作業は、その後比較的温暖な天候が続いたおかげで12月13日まで継続し、掘りあげた土はすべて洗いきることができた。しかし、プレハブは11月いっぱいまで明け渡すことになっていたため12月1日に器材の一部を搬出し、残りはテントに移動した。6日にプレハブが撤去され、15日～17日に現場の後片付け及び器材搬出を終え発掘調査を完了した。

第III章 遺 構

昭和60年度、昭和61年度の調査で検出された遺構は、玉作り工房址と考えられる住居址1棟、土坑245基、溝2本の他小ピットが多数であった。これらの遺構は、そのほとんどが弥生時代中期中葉の所産であり、北側湿地帯と調査区西側を南北に走る溝(SD-001)に挟まれた調査区北東部(約770×60m)に集中している。しかし、上面がかなり削平されている関係もあり、掘り込みは浅いものが多く、また遺構内出土の遺物の有り様も散漫なものが多いため性格を把握できるものが少ない状況である。遺構内堆積状況はレンズ状自然堆積を呈するものがほとんどで、ほぼ全ての遺構覆土には数mm～2・3cm大の炭化物が多く含まれていた。

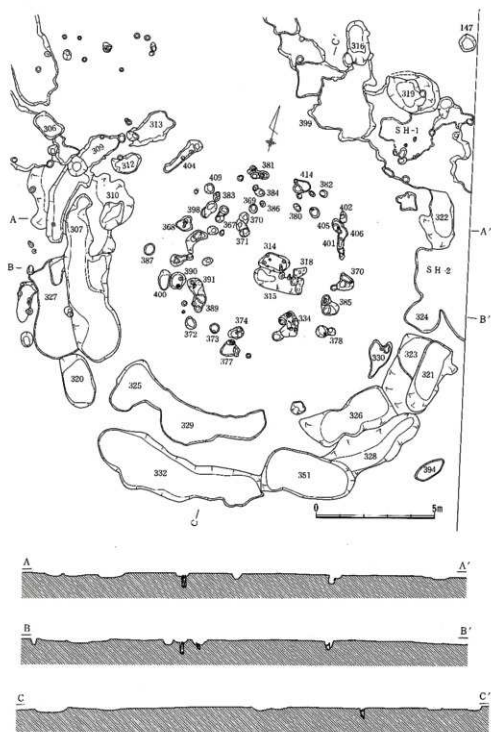
1 住居址(工房址)

遺構南東隅、H-1・2区、I-1・2区に位置し、東側は一部調査区外にかかっている。幅1m前後、深さ10～20cm程度の浅皿状大型土坑が連なるように周溝が二重に巡り、内側には柱穴が円形に並んでいる。中央には深さ10～15cmの浅皿状土坑が2基(S-314・S-315)並んでおり、S-315の方には炭化物がびっしり詰まっていた。

規模は、柱穴状小ピット群の直径が約8.2m、周溝も含めた直径は大きい方で約18.5m、小さい方で約15.8m、内径約12.8mを測る。周溝は、北西部分で途切れて開口している。

小ピットは直径約40～70cm、深さ約20～40cmを測り約50個検出されたが、この内柱根と思われる丸木が6本と木片が12片残存していた。確認面から深いもので50cm埋め込まれており、太さは約15cmで、根部分が太くなっている。腐食が進んでおり、加工痕を有するものは2本のみで、根部分を尖らせる形で認められた。おそらく、切り出した際の斧の痕であると思われる。周溝の状況から考えても立て替えがあったと考えられるが、支柱が何本であったかは明確にはできないが柱痕の残存状況から推定すると6～8本であつた可能性が高い。小ピット群の内、工作ピットと思われるものも含まれている。北西側の一群にそれに属するものがあり、S-367では破損の少ない玉錐が3点出土し、S-369には施溝分割により半截されたばかりの管玉未成品(第2工程品)が納められていた。

遺物は玉作り関係遺物を中心に全体に多量に出土しているが、上面が削平されている関係で、位置が特定できるものは周溝、小ピット内出土のものに限られる。東側周溝のS-310付近では、管玉未成品(第5工程品)が10数本まとめて出土している他、この周辺と対面の西側周溝では玉錐未成品、完成品、玉鋸片が比較的多量に出土している。一方、南側周溝では玉作り関係遺物が周溝の他の部分に比べて少ないが、S-332付近では安山岩のフレイクが集中して出土している。周溝の内側では、中央の土坑(S-315)内で玉作り関係遺物を中心に比較的多量に出土している以外は量的には少ない。



第5図 住居址（玉作り工房址）

2 土 坑

総数245基が検出されている。形態は様々であるが、大きくは溝状土坑とそれ以外の土坑とに分けられる。溝状土坑には大形のもの和小形のものがある。以下主なものについて個々に説明していくことにする。

S-171

K-3区南東隅に位置し、S-175と並行している。上端で約311.5×81cm、深さ21cmを測り、細長い小判形を呈している。土層は、一部に崩落土が入り込む以外は単一層で多量の炭化物が混入している。遺物は多量の弥生土器片以外はほとんど出土していない。

S-175

K-2, 3区にまたがった位置にあり、S-179に切られている。上端で約394×211.5cm、深さ27cmを測り、隅丸長方形を呈する。遺物は、管玉完成品6点、玉錐2点で目立っており、わずかに玉鋸片、碧玉片、翡翠片などが出土した他、弥生土器片が多量出土している。

S-179

K-2区に位置し、S-175を切り、S-180に切られている。上端で約301×197cm、深さ32.5cmを測り、不等辺三角形を呈する。遺物は覆土内より、弥生土器片多量の他、管玉17点、玉錐2点、玉錐未製品12点、磨石などが出土した。管玉は、S-175とほぼ同じ形態を持つ、細長いものが主体を占めている。

S-180

K-2区に位置しており、S-179を切っている。上端で約121×102cm、深さ45cmを測り、不整楕円形で壁がほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、ほぼ1個体分の弥生時代中期中葉の菱形土器が、覆土の中間付近に潰れたような状態で出土した他、管玉、玉錐未成品、玉鋸など玉作り関係遺物も比較的多く出土している。

S-305

J-1区に位置し、工房址の北西隅に接する。上端で最大約612×253cm、深さ約20cmを測る。不整楕円形で壁は浅皿状に立ち上がり、底面は凹凸が多い。遺物は、土器片多数の他、玉作り関係の遺物が多数出土しているが、中でも玉錐未成品の数が比較的高い割合を占めている。

S-306

I-2区とJ-2区にまたがっており、S-305を南東隅付近で切っている。上端で約133×75cm、深さ32cmを測り、小判形で壁は急角度で立ち上がる。遺物は、流紋岩製の石槍が西壁の開口部付近で出土したほか、管玉が2点と土器少量が出土しているが玉作り関係遺物はほとんどみられない。

S-193・194

M-5区からN-5区にかけてほぼ東西に走る、長さ542cm、幅112cm、深さ



第6図 S-306
出土石槍



第7图 总图全图

13cmの溝状土坑である。断面形は浅皿状を呈し、底面はやや凹凸がみられる。

遺物は、東側で碧玉石核が比較的多く出土し、そのすぐ西側で同一個体と思われる土器細片が潰れたような状態で出土した。

S-195

N-5区、S-194の北側に位置し、S-197Aの東側を切っている。上端で約212×180cm、深さ40cmを測り、ややいびつな楕円形で、壁はやや急に立ち上がり、底は丸みを帯びる。遺物は流れ込んだように壁際で多く出土し、多量の土器片ほか玉錐、勾玉未成品、磨石等が出土している。

S-197

N-5区に位置し、東側でS-195に切られ、西側は削平により上部が消失している。上端で約606×146cm、深さ30cmを測る溝状土坑であるが、東側は別の土坑が切っており(S-197A)、直径約200cmを測る不整形を呈す。遺物はS-197Aに多くが集中し、多量の土器片と共に石庖丁、磨製石斧、磨石、玉錐、玉鐙等が出土している。S-197は遺物が散在しており土器片以外では管玉未成品、玉錐未成品等がわずかにみられる程度である。

S-160

J-3区中央付近に位置し、S-163を切っている。上端で約181×96cm、深さ22cmを測り、不整隅丸方形を呈し壁はゆるやかに立ち上がり、平坦な底面を有する。遺物は、土器片が少量出土した他は、玉錐、管玉の未成品がわずかにある程度である。

S-162

J-3区南端に位置し、S-161とS-163を切っているが、西側でS-164に東側でS-303にそれぞれ切られている。規模は上端推定で約340×156cm、深さ24cmを測り、西側にゆるやかな段を有し、東西に長い不整な楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、土器が散在する以外はほとんどみられない。

S-163

J-3区に位置しS-162、S-161などに切られているため全容は不明であるが、幅78cm、深さ12cmを測り、南北に延びる浅い溝状土坑であったと思われる。遺物は、勾玉が1点出土している。

S-164

J-3区南端に位置し、上部は浅皿状土坑により切られている。規模は上端で約160×105cm、深さ53cmを測り、断面U字型の楕円形を呈する。比較的深い土坑であり土壌墓と考えられるものの1つであるが、遺物の量は極めて少ない。

S-303

J-2区からJ-3区に延びる溝状土坑で、北でS-162と切り合い、南でS-305と接する。規模は上端で約715×252cm、深さ26cmを測り、底は浅皿状を呈し壁は比較的急に立ち上がる。遺物は土坑の大きさに比べれば多くはないが、土器片が中央付近に比較的多く出土したほか、S-305同様に玉錐未成品が他の遺物が少ない割には多く出土している。

S-123・128

I-4区南西部に位置し、北側でS-122・124に各々切られている。南側は、やや深くなり別の土坑が切り合っている可能性があるが(S-128)、新旧関係は明らかにしえなかった。規模はS-128も含め上端で約536×195cm、深さ27cmを測り、南へ向かって幅が狭くなる溝状土坑である。底面は北側では平坦面を持つが、南側に向かうに従って舟底状になっている。壁は全体的にゆるやかに立ち上がる。遺物は土器片少量の他、石鏃、磨製石斧、管玉などが出土している。

S-122

S-123を切った状態で北側に接し、上端で約138×109cmを測る円形を呈するものである。底は浅皿状に丸みを帯び、壁がゆるやかに立ち上がる。遺物は、土器片少量の他、管玉、磨石、砥石などか出土しているが、全体に質・量とも少ない。

S-124

S-122の西側に位置し、S-123と南側で切り合っている。規模は上端で約143×63cm、深さ26.5cmを測り細長い楕円形を呈し壁は垂直に近い状態で急に立ち上がっている。遺物は土器片が上層で少量出土した他、管玉が出土しているが、玉作り関係遺物はほとんどない。

S-126

S-123の南東側に位置し、南側でS-127と接している。上端で約192×88cmを測る小判形を呈する土坑で、断面は浅皿状を呈する。遺物は土器片が若干ある程度であるが、底付近で板材が出土した。しかし、遺存が悪く詳細は不明である。

S-112

J-4区南西部に位置し、上端で約530×141cm、深さ39cmを測る。南側に向かって先細りする溝状土坑で、壁はやや急に立ち上がる。遺物は、土器片が多量に出土したほか、北側壁際上層で翡翠製小玉1点、管玉6点と玉錐未成品など玉作り関係遺物が数10点と石鏃などが出土した。

S-280

M-1区北東隅に位置し、一部L-1区に延びる。南側の浅い部分は遺構かどうか確定できず、遺構の主たる部分は北側の溝状土坑である。この溝状土坑は、中央付近で浅い円形土坑を切って作っており、規模は上端で約472×106cm、深さ約26cm、また中央付近の土坑は幅約273cm、深さ約17cmを測る。遺物は、溝状土坑の中央から西側にかけて集中し、やや南側に偏在している。大きな土器片が多量に出土したほか、凝灰質砂岩製の石製円盤、砥石、磨石、磨製石斧、石鏃などの石器類も比較的豊富にあり、また玉作り関係遺物は玉錐2点のほか、管玉未成品(第5工程品)が工房址周溝(S-310)と同様に11点まとめて出土している。

S-295

K-2区南東隅に位置し、一部K-1区に延びる。南側はS-300と切り合っており、上層部分を切られている。規模は上端で約376×89cm、深さ23cmを測り、ややいびつな溝状土坑である。壁はやや急に立ち上がり、底部はわずかに平坦面を有する。遺物は少なく、土器片が散在して出土したほか、石鏃、石庖丁などの石器が数点あり、玉作り関係では管玉、玉錐、玉鏃が出土しているもの

の、いずれも完成品で未成品はない。

S-300

K-1区北東隅に位置し、S-295と西側で切り合う。規模は上端で約147×119cm、深さ25cmを測り、不整楕円形で中央付近が一段落ち込んでいる。遺物は、土器片が1～2層にかけて数個体分が層状に折り重なって出土したほか、磨石、磨製石斧等が若干あるが玉作り関係遺物はほとんどない。

S-087

K-5区南端に位置し、規模は上端で約249×75cm、深さ25cmを測る。東西方向に長い隅丸長方形で、底は平坦な面を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、土器片が若干と玉錐未成品、玉鋸が出土している程度で少ない。

S-170

K-3区北端に位置し、規模は上端で約204×70cm、深さ11cmを測る。北東から南西に長い隅丸長方形で、底は平坦面を有し壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、土器片、玉鋸片、翡翠片が若干出土している程度で少ない。

S-211

M-4区北東隅に位置し、規模は上端で約232×61cm、深さ17cmを測る。北東から南西に長い楕円形で、底は平坦面を有し壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、土器片、瑪瑙製玉錐未成品、管玉未製品、碧玉片、翡翠片などが若干出土している程度で少ない。

S-140

H-3区東側に位置し、規模は上端で約284×80cm、深さ13cmを測る。北東から南西に長い長楕円形の溝状遺構で、断面は浅皿状を呈する。遺物は北東側に集中し、底面近くに多量の土器片と共に、大形で片側に刃部を有する玉鋸が2点出土し接合した。他には、玉錐未製品がある程度である。

S-156

J-3区に位置し、ほぼ東西方向に延びる細長い溝状土坑である。規模は上端で約381×61cm、深さ18cmを測り、断面U字形を呈する。遺物は、東側部分で土器片が若干出土したが全体に量は少なく、玉作り関係では碧玉片がほとんどないのに対し、翡翠片が比較的多く他に玉錐未製品が出土している。

S-176

K-3区北西隅から一部L-3区に掛かる北北西～西南西に延びる溝状土坑である。規模は上端で473×52cm、深さ15cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。遺物はほとんど出土せず、土器片が少々ある程度である。

S-296

J-2区北西部に位置し、北東側でS-297と切り合う。規模は上端で推定約340×65cm、深さ16cmを測り、東側でやや広がりを持つ溝状土坑で、断面は浅皿状を呈している。遺物は土器片のほか、

管玉やその未成品が若干と、玉錐未成品が比較的多く出土している。

S-297

S-296と切り合う不整形土坑で、南側に多くの小ビットが切り合っている。規模は上端で約274cm×176cm、深さ約13cmを測り、ビットの深さは最深部で約37cmである。遺物は少量で、土器は西側ビット内より壺のけい部から口縁部にかけての部分で横倒しにつぶれた状態で出土した以外は目立ったものはなく、S-364から石鐮が1点出土した程度である。

S-275

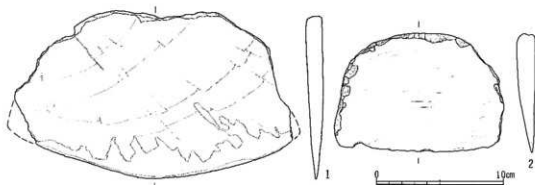
M-2区南東隅に位置する。上端で265×201cm、深さ38cmを測る不整形土坑で、底部はやや丸みを帯び、壁はやや急に立ち上がる。遺物は中央付近に集中し、多量の土器片ほか石鐮3点、磨製石斧、磨石等の石器類も比較的多く出土している。玉作り関係では、玉錐2点のほかその未成品、管玉未成品、勾玉未成品などが出土しているが、その中でも玉錐未成品の量が多い方である。

S-294

K-2区北側でS-179のすぐ南側に位置する。上端で長さ279cm、幅181cm、深さ36cmを測り、隅丸長方形をややくの字に屈曲させたような形を呈する。数個の土坑の切り合いとも考えられるが、土層などでそれを確認することはできなかった。遺物は、上層部分から多量の土器片が出土し、石鐮、石錐、管玉、玉錐未成品なども少量ではあるが出土している。

S-105

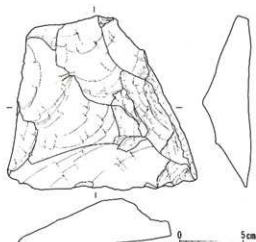
J-4区北西隅、S-112の北側に位置し、S-112とはほぼ同一方位を持っている。上端で277×130cmを測る楕円形で、断面形は舟底形を呈し短軸方向の壁が急に立ち上がるのに対し、長軸方向ではゆるやかに立ち上がる。遺物は、3層上面付近より安山岩製大型石庖丁が2点出土したほか、管玉、玉錐未成品、砥石等が若干と、土器片が比較的多く出土している。



第8図 S-105出土大型石庖丁実測図

S-220

L-4区、M-4区両者にまたがる位置にあり、上端で256×154cm、深さ50cmを測る大型楕円形上坑で、壁がほぼ垂直に立ち上がり底に平坦面を有する。遺物は、中央東寄り下層部分から安山岩製の打製石斧(石鏃)が出土している。ほか、土器片、管玉、玉錐未成品などが若干出土している。また中央西寄り下層部分から木片が検出できたが遺存が悪く詳細は不明である。



第9図 S-220出土石鏃実測図

S-073・074

I-5区に位置し、S-073北側は農道下に入り調査できなかった。S-074は上端で約220×198cm、

深さ35cmを測る不整形円形で、断面は浅皿状を呈する。S-073は全形が不明だが、幅約176cm、深さ約21cmを測り、S-074よりひとまわり小さい。遺物は、S-073で土器片が多量に出土しているが、他の遺物はほとんどなく、S-074も土器片数こそ多いものの他の遺物は石鏃、石錐が1点ずつ出土しただけである。

S-106・108

K-4区に位置し、S-106はS-107に切られる。S-106とS-108の切り合い関係は明確ではないが、S-108が新しい可能性が高い。規模はS-106が上端で約180×69cm、深さ約12cmを測り、長楕円形で断面は浅皿状を呈する。S-108は上端で約170×93cm、深さ約21cmを測り楕円形を呈する。遺物は土器片が若干あるほか、S-106、S-108それぞれ各々1点ずつ玉錐が出土している。

S-107

円形を呈し、上端で約115×105cm、深さ約23cmを測る。遺物は、管玉とその未成品が1点ずつある以外は土器片が若干出土しているのみである。

S-085

J-5区西側に位置し、上端で約165×104cm、深さ31cmを測る。楕円形を呈し、壁はやや急に立ち上がり、北側に楕円形の落ち込みがみられる。遺物は土器片がほとんどで、北側を中心に流れ込んだように壁際から出土した。他に、石鏃が1点出土している。

S-095

K-4区中央付近に位置し、上端で約151×87cm、深さ約30cmを測る。隅丸長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周囲には、直径約20cm弱の小ビットが4個検出できたが、S-095とのかかわりは不明である。遺物は少量だが管玉が4点出土している。

S-223

M-4区南西隅に位置し、上端で約177×83cm、深さ約26cmを測る。不整形隅丸長方形を呈し、

底は舟底形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少量だが玉断片は比較的多く出土している。

S-113

J-4区北端に位置し、上端で約173×153cm、深さ約24cmを測る。円形で、断面形は浅皿状を呈している。遺物は土器片が若干出土したほか、砥石・磨製石斧等が出土している。

S-184

L-4区北側に位置し、上端で約135×110cm、深さ23cmを測る。不整形円で、底は平坦面を有し壁はやや急に立ち上がる。遺物は少量だが、管玉と玉錐が各1点ずつ出土している。

S-276・277

M-2区東端に位置し、南北方向に並ぶ土坑でS-277の方が新しいと思われる。S-276は上端で約101×100cm、深さ約23cmを測り、S-277は上端で約150×106cm、深さ約20cmを測る。両者とも平面形は不整形円で、断面形はS-276が浅皿状を呈するのに対し、S-277は底が平坦になる箱型を呈する。遺物は、S-276はやや大きな土器片が上層から出土し、他に管玉1点と玉錐未成品等が出土している。S-277は管玉2点と玉錐未成品のほか土器細片が少量みられる。

S-288

N-2区のSD-001から約2m北東に離れた位置にあり、東側でS-379を切って作られている。上端で約254×111cm、深さ約68cmを測る。楕円形を呈し、長軸方向はゆるやかに壁が立ち上がるが、短軸方向の壁はほぼ垂直で、底は平坦面を有する。遺物は、中央低面直上で刃部を欠損した磨製石斧が出土したほか、石鏃が1点有り、土器片が比較的多量に出土している。

S-138

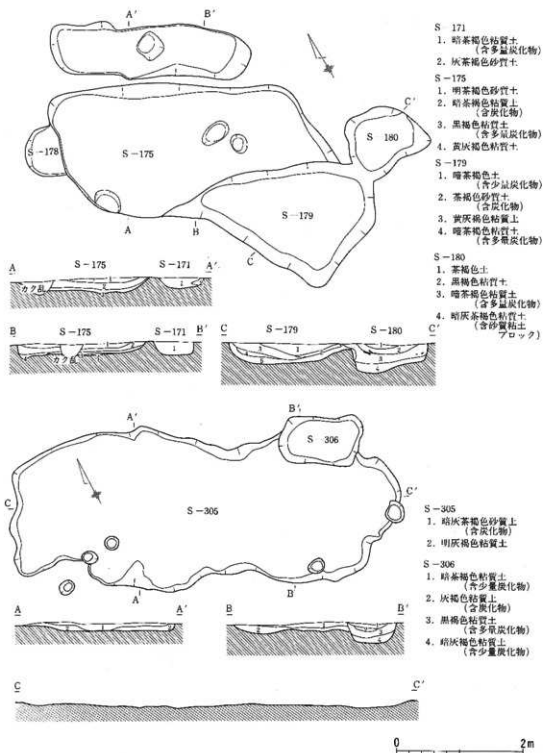
H-4区中央付近に位置し、南側で溝状土坑S-137を切って作られている。上端で約213×102cm、深さ73cmを測る。楕円形で断面はU字形となり上端では段が出来る部分もある。遺物は管玉2点、玉錐1点、玉錐未成品のほか石鏃が3点出土しているが、土器量は少ない。このうち管玉は、他の管玉と材質、大きさ共に異なり、黒色系の石を利用したやや大きめのものである。この土坑は、深く最下層に黒褐色粘土が堆積するという点で他の土坑とは様相を異にする。管玉の違いも含め、この土坑が他とは違うことをうかがわせるものだが、土器では時期差は明確にいえなかった。

S-096

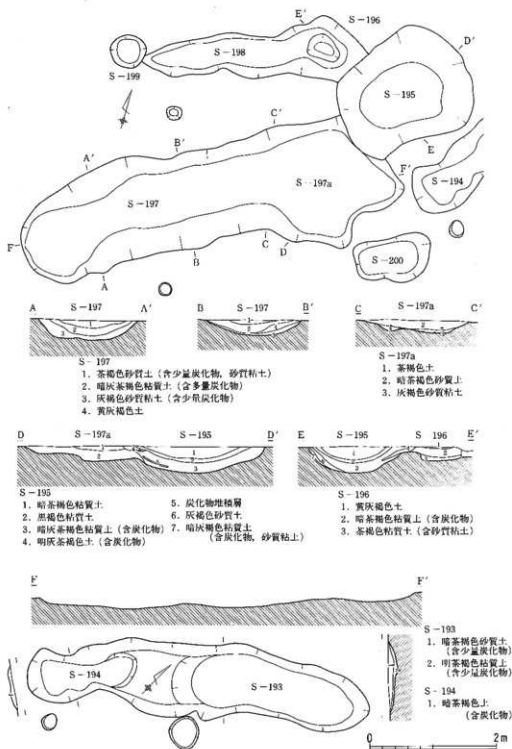
K-4区南西部に位置し、上端で約196×74cm、深さ35cmを測る。楕円形を呈し、東側に細長いテラスを作り壁は垂直に近い。遺物は少量で、管玉1点と玉作り関係遺物が若干、土器小片がわずかに出土している程度である。

S-186

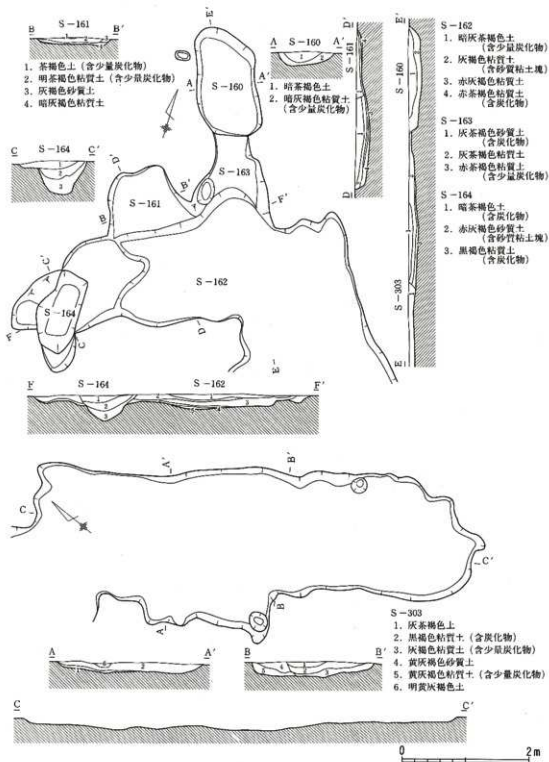
L-4区北西隅からM-4区にかかる位置にあり、S-215を南側で切って作られている。上端で約235×100cm、深さ22cmを測る。不整形楕円形で、底は平坦面を有し壁はややゆるやかに立ち上がる。遺物は、管玉1点と玉作り関係遺物が若干と土器片が少量出土している。



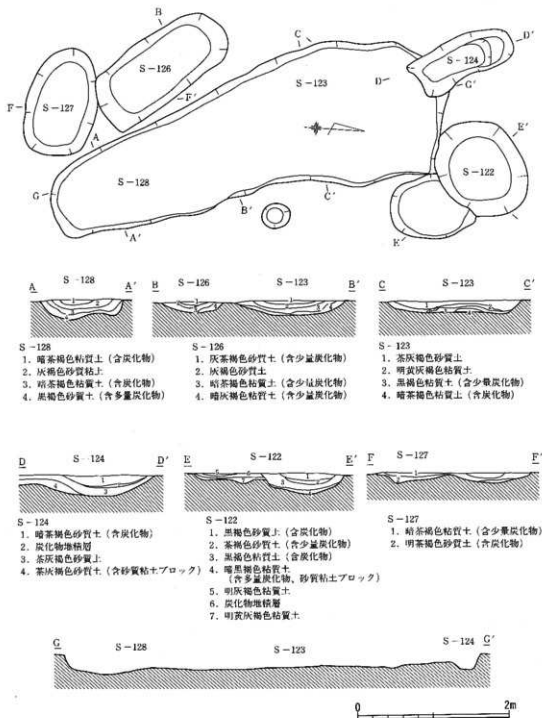
第10図 土坑実測図(1)



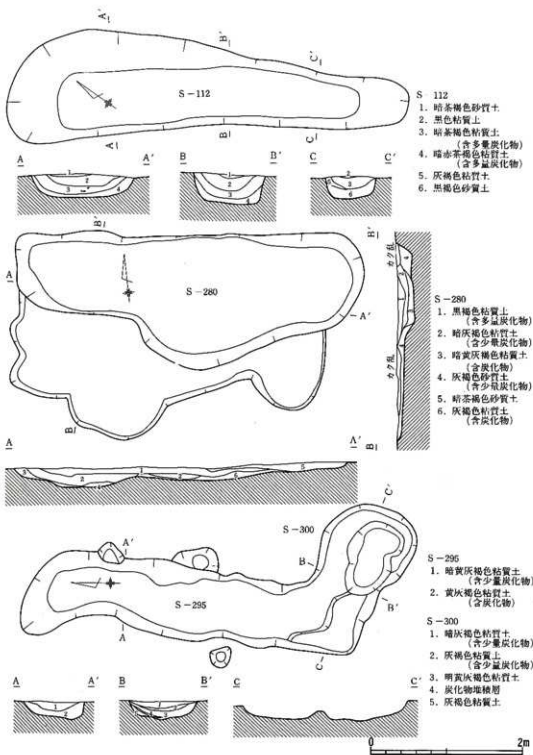
第11圖 土坑實測圖 (2)



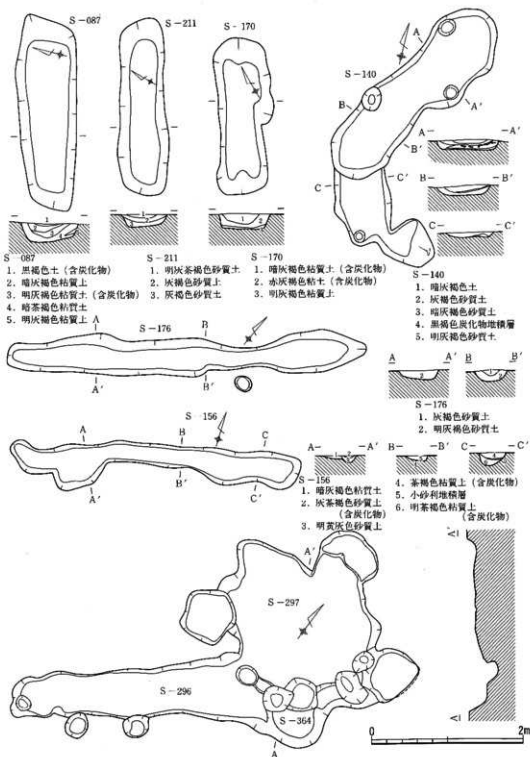
第12圖 土坑実測図 (3)



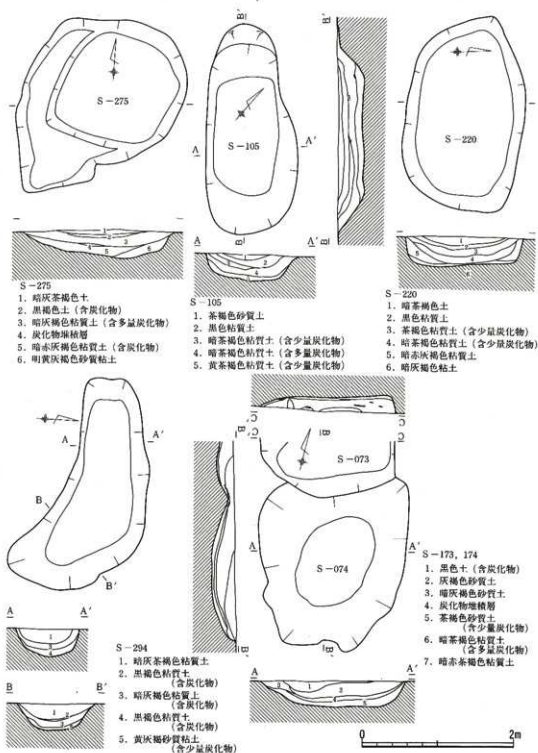
第13図 土坑実測図 (4)



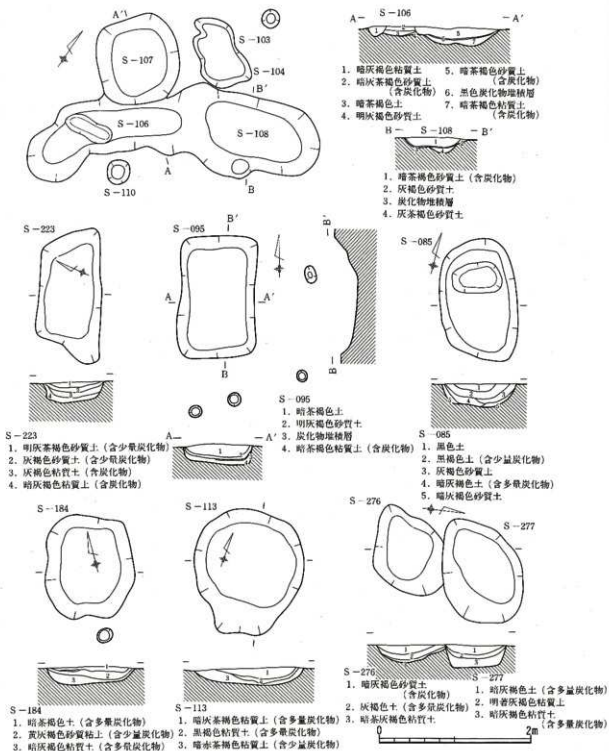
第14圖 土坑実測図 (5)



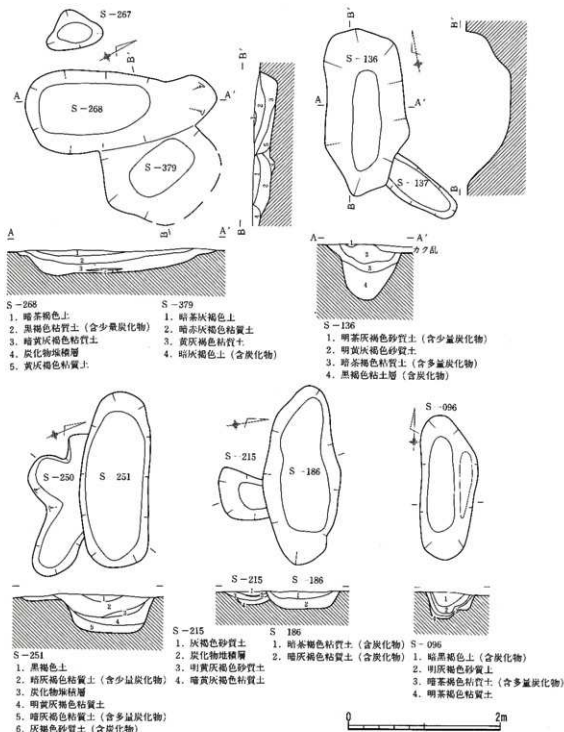
第15图 土坑实测图 (6)



第16圖 土坑実測圖 (7)



第17圖 土坑測圖 (8)



第18圖 土坑実測図 (9)

S-251

M-3区とN-3区にまたがる位置にあり、南側で浅い土坑S-250を切って作られている。上端で約231×92cm、深さ51cmを測る。楕円形で断面形は底が平坦になるU字形を呈する。遺物は中央付近で土器片がまとまって出土した。その他には、管玉2点、玉錐3点、玉錐未成品が18点など玉作り関係遺物が比較的多く出土している。

3 溝状遺構

本遺跡では調査区西側に2本の溝が検出されており、北側の溝をSD-001、南側の溝をSD-002とした。

SD-001

調査区北西部(O-5区)から南西部(M-1区)まで延びる、全長約50m、幅約2m、深さ約0.4mの溝である。北側湿地帯とつながり、そこからやや南東方向に30m程延びたところで、東寄りに向きを変えてさらに20mほど延びたところで徐々に浅くなり自然消滅していた。断面はU字形で壁はゆるやかに立ち上がり、上面が削平されていることを考慮に入れても、それほど深い溝ではなかったようである。

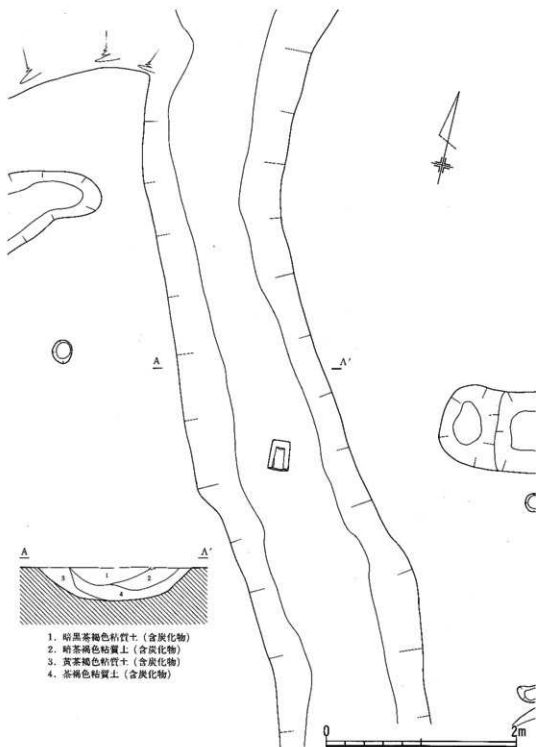
遺物は、中層から下層にかけてかなり多く出土している。湿地帯から約8m離れた地点からは、銅鍍鋳型鋳型が出土した。溝の底面から約10cm浮いた中央付近で、水平に近い状態で内側を上に向け、溝とほぼ平行に横たわっていた。そのほかの遺物としては、石鏃・磨石類などの石器が少量と、玉関係遺物として管玉・玉錐とそれらの未成品・玉鉋片・翡翠片など一通りのものは出土している。土器片が最も多く、すべて弥生時代中期中葉に属するもので完形品に近い状態で出土したものはほとんどなかった。

SD-002

SD-001のすぐ南側(N-1区)から西に25m程延びたところで直角に曲がって南に向っている溝で、角から約10mまで検出したが、さらに南に延びるものと思われる。幅は、直線部分の上端で約1m、コーナー部分ではやや広くなり2～2.5mを測る。深さは0.3～0.35mで、底面はかなり凸凹している。土層は、しまり、粘性とも弱い黒褐色の単一層で、炭化物は含まれていなかった。

遺物は少量で、古墳時代初頭の土器片が僅かに出土したほか、他の遺構では多量に含まれていた碧玉片も、2～5mm大のチップが極僅かにみられた程度であった。ただ翡翠製の扁平勾玉が1点出土している。碧玉片と勾玉は、SD-001に近い東側で出土していることから、混入品である可能性もある。

以上の点から、SD-002は古墳時代初頭以降に掘られた遺構と考えられるが、その性格については明確にしなかった。



第19図 SD-001と銅鐻出土状況図

第IV章 遺物

下層敷遺跡から出土した遺物は、銅鐸鑄型をはじめ多量の玉作り関係遺物と共に多量の土器、石器も出土した。玉作り関係では碧玉製管玉とその未成品、翡翠製勾玉とその未成品のほか、玉錐や玉鐸などの工具類も多数出土している。石器類としては、石鏃126点のほか、大型石庖丁、扁平片刃磨製石斧、太型蛤刃磨製石斧、石錐、磨石類などが出土している。しかし、整理作業の進行状況、紙面などの都合により本書では、玉作り関係遺物中心に記載した。特に、土器については整理が完了していない関係で、詳細が判明していない。土器、石器については、銅鐸鑄型が出土したSD-001のものに限って記載した。これらの詳細については、整理完了後にあらためて報告する予定にしている。

1 銅鐸鑄型 (第20図)

鑄型は、凝灰質砂岩製で上の幅がやや狭い丈長の台形をしている。もう一方の型と合う内側は、平坦で外側が膨らんだカマボコ形である。外側の背面は、のちに砥石に転用されていたため平滑な広い面が作られている。鑄型の計測値は、高さが31.3cm、幅が上端で18.5cm、下端で22.65cm、奥行きが上端で8.7cm、下端で10.3cmである。内側に彫られた銅鐸の型は、途中で製作が中止され、鐸身の概形だけであった。鏤・鈕・文様などは、彫られる前に製作が中止されていた。遺された鐸身部分の計測値は、高さが20.7cm、裾の中が約12cm、舞部の中が9.25cm、奥行きが裾で4.4cm、舞部で2.9cmである。表面が剥落していない部分は、丹念な研磨が施された鐸身と砥石に使用された面などで、側面には、著しい剥落がある。

2 SD-001出土土器

本遺跡から出土した土器は、現在整理作業中であり全体像については残念ながら今回は報告することができない。土器についてはSD-001より出土した土器に限って概要を述べておくことに止めておく。詳細については、今後機会をみて報告する予定である。

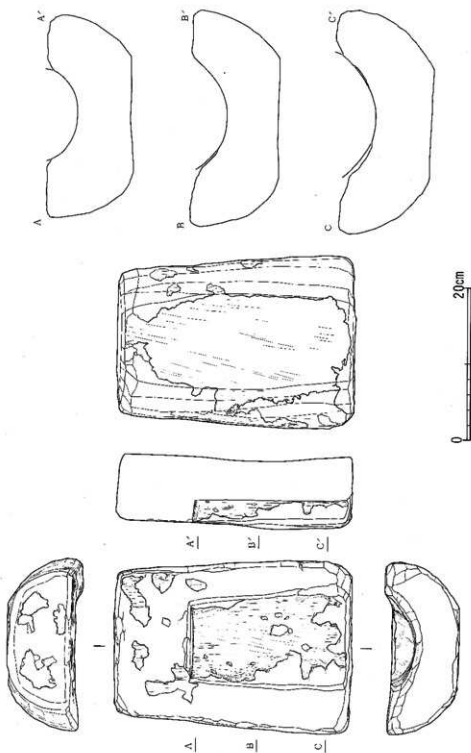
SD-001より出土した土器は、破片がほとんどでコンテナ箱にして5箱程度である。復元が可能なものはそのうち20数個体になると思われる。溝内には、廃棄されたような状況で埋まっており完形品は出土していない。

本遺跡では、弥生時代中期中葉に属する条痕文系土器と櫛目文系土器、古墳時代初頭の土器が出土しているが、後者は極僅かにすぎず、SD-001からも前者の土器のみが出土している。器種は壺形土器と甕形土器のみで、量的には後者がかなり多い傾向にある。

以下は、図示した土器について個別に説明していく。

●形土器 (第23図)

全体の形態が明確なものが少ないので、口縁部形態を主として見ていきたい。口縁部形態としては、外反する口縁の先端を内彎させたもの(1, 2)、口縁が外反するだけのもの(3～9)に大



第20圖 銅鏡鑄型実測図

きく2分類できる。2は、口縁部外面に粘土帯を貼りつけ、その下端に指頭押圧が施され、上半には太櫛による短沈線が、屈曲部には刺突がみられる。1は、口縁にハケによる羽状刺突が端部にも綾杉状の刺突がめぐり、頸部には櫛による平行線文と波状文が施されている。調整は、1、2とも表面がハケ、裏面がナデ調整である。3、4は、口縁端部に格子状に刺突が施され、その内面には3では波状文、4では流水文がそれぞれ施されている。頸部は3が平行線文、4が波状文と平行線文が交互に繰り返され、下端は棒状工具による刺突がめぐっている。5～7は、口縁部に1条の沈線が引かれたもので、5は上から指頭押圧により、口縁が小波状となる。6、7は縦方向で綾杉状に刻みが入ったものである。7の縦方向の刻みの場合は、沈線が後から引かれている。調整は5が表裏ともハケ、6は表面はヘラケズリ、裏面はハケ調整の上をナデで消している。7は表面がハケ、裏面は条痕である。

変形土器 (第24図)

条痕文系の甕は、1のように胴部から口縁まで直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する程度の深鉢形をしたものが主で、横位の条痕が施されている。櫛描文系の甕は、胴部上半に平行線文と波状文を交互に施文し(3、5)胴部の張りかほとんどなく直線的に立ち上がるタイプと、表面がハケ調整だけで、胴部にはやや張りがみられ丸みを帯びるタイプのものにほぼ分けられる。口縁端部は、刺突が施されている場合が多く、6のように指頭押圧により小波状を呈するものも若干みられる。口縁内面に波状文、刺突文を施すものが少数だがみられ、前者のタイプにその出現率が高い。7は明らかな搬入品で、山陽方面にその類例をみることができることから、丹後あるいは山陰地方を経由して持ち込まれたものであろう。胴部がやや張り、口縁はく字形で外反し、胴部最大径付近に刺突文が施されている。ナデ調整が裏面と表面胴上半部にみられ、表面胴下半はヘラ削りが行われ、器壁は極めて薄く0.2～0.25cmを測り、底部内面は平坦面を有し器壁との間には角が立っている。

3 SD-001出土石器 (第25図)

SD-001出土の石器類は、土器量に比べてかなり少ない。図26はその一部である、以下個別に説明をしていきたい。

石鏃は打製で4点出土している。1・2とも安山岩製で、1はO-5区付近で出土したもので、最大長3.46cm・最大幅1.66cm・最大厚0.48cm・重さ2.2gを測る。側縁は基部に向かってわずかに張りだし、基部は凹基で両端が脚部のようにわずかに外に張り出して突出している。縦長剥片を素材とし、表面は全面にわたって調整が加えられているものの、裏面は主要剥離面を残し、先端部と周縁部のみに調整が加えられているため先端部付近にだけ稜を有する。2はO-4区出土のもので、最大長3.34cm・最大幅1.44cm・最大厚0.23cm・重さ1.1gを測る。柳葉形を呈し、基部は未調整で厚みを残し鋭く尖っている。周縁部を中心に調整が加えられているため稜は立たず扁平な断面形を呈する。

3はM-1区の溝最南端で出土した珪質安山岩製の打製石斧様石器である。最大長12.92cm・最

大幅5.06cm・最大厚2.02cm・重さ129.5gを測る。板状剥片を利用し、右側縁裏面を主として調整が加えられ基部にえぐりが入る形態を呈する。しかし、打撃が側縁部から内側に向かって連続して加えられている箇所は、この基部付近に限られており刃部の作り出しも明確ではないことから、打製石斧の未成品の可能性が高いが、何か別のものとも考えられるが判然とはしない。

4～8は磨石類である。4は、多孔質の安山岩製でやや平たい卵型を呈し、周辺に敲打痕が認められ、平坦面には僅かではあるが擦られた跡がみられる。5は、平たい楕円形を呈し、表裏面の凹みと上下両端の敲打痕が顕著にみられるものである。6は、丸みのある楕円形を呈し、表裏面には顕著は擦られ滑らかな面を作っている。7は石皿で、表裏面はわずかに凹み周縁には敲打痕がみられ、敲打の影響と思われる剥離が認められる。8はほぼ球形を呈し、部分的に敲打痕がみられるほか、擦られて平坦面を作っている箇所が顕著に認められる。

SD-001出土磨石類計測表

図No.	種 別	最大長	最大幅	最大厚	重さ	出土区
4	磨石 敲石	7.21cm	5.52cm	3.81cm	177.4g	N-1区
5	凹石 敲石	14.83	10.8	6.07	1530.0	O-3区
6	磨石	12.77	10.01	7.12	1370.0	O-4区
7	石皿 敲石	13.42	11.86	3.15	818.0	N-2区
8	磨石 敲石	7.20	6.99	6.76	423.0	M-1区

4 玉作り関係工具

玉鐮（第28図）

施溝分割にかかわる擦り切り工具で、材質は紅簾片岩を主とした結晶片岩である。刃部を遺し形態の推定できるものが90点余り、剥片も含めると約1080点に達する。その約45%は工房址周辺に集中する。出土したものの多くは欠損しているため、完形品がどのような形態をしていたものか明確ではないが、刃部の作られかたにより次のように一応分類できる。

I 類 片側辺に刃部を有するもの（第27図）

a-背部が三角形を呈するもの（1, 3）

b-背部が刃部と平行するもの（2, 4, 5, 7～9, 11～14）

II 類 両側辺に刃部を有するもの（第28図）

II類には、端部を丸く加工するものと、そうしないものの2種が存在すると想定できるのだが、両端を欠損しているものなのか、当初から端部が未処理の状態であったものか、判別が困難であるため分類基準としては用いなかった。

I a類の典型的な例としては（1, 3）で、山形を呈する背部は手になじむように研磨されている。6, 10, 13は、欠損箇所が大きいため詳細は不明であるが、いずれも石の目の方向に対して斜向して

刃部が作られている点から、I a類に分類できる可能性が高い。I b類の内、完形品に近いと思われるのが9, 11で、いずれもやや反りを持つ薄手の紅簾片岩製で、両刃の刃部を片刃に持つ。9は、S-140から出土した2辺が接合したものであるが、それぞれでも十分に使用可能な大きさを持っており、また刃部幅が接合線付近で微妙に異なり、個々に使用された可能性もある。11は、工房址内ビットS-367から出土したもので、表面が部分的に研磨され光沢を有し、刃部は表面を主とし斜方向の研磨によって作り出されている。2は未成品と思われるもので、刃部及び側面に押圧剥離が施され、刃部を鋭く作ったのであろう。

II類は、大きさ種類共にバラエティーに富み、特に小型品が多いのが特徴といえる。19・21は大型品である。19は、接合資料で下は工房址付近から、上はS-237から出土したもので、直線距離にして40m近く離れている。S-237の資料は端部が切断面であるのに対して、上の資料は端部に研磨による面取りがみられる。この点から、別々に使用された可能性も強いが、当初から別々の製品として利用されたものか、折れたために再利用されたものかは判然としない。21は、復元すると最大のもので、刃部は波状を呈し明確に作り出された刃部ではない。刃部に向かい徐々に薄くなる形態を取る。15-18, 20, 29は中型品で両面から刃部が作り出され、断面形は中央が両面から凹むことで刃部が明瞭になる形態を取る。20, 29は端部に調整加工の痕がみられる。22-28, 32は小型品で、22, 23は棒状のもので刃部も丸みを帯びる。他の断面形は中型品と同様で、端部に調整加工が施されて丸くなるもの(26-28)と、切断面のままのもの(24-25, 32)がある。30, 31は刃部が鋭角にならず、やや平坦面を持ち、端部が研磨により面取りされたもので、玉鋸とするにはやや疑問が残る資料である。

砥石 (第26図)

筋砥石と平砥石が出土しているが、玉作りに関係するものがどれに該当するかは特定できない。石材としては、凝灰質砂岩、砂岩、安山岩、石英安山岩が使用され、砂岩製が最も多い。1は、石英安山岩製の筋砥石で、中央縦方向に最も明瞭な溝が走り、他に浅く短い溝が何条かみられる。2も筋砥石で凝灰質砂岩製である。正面中央に縦方向の深いV字状の溝があり、それにやや斜向する形で細い溝が何条も残っているほか、背面には正面のそれと直交する溝が剥離面に残されている。3, 4は、平砥石で手持ち用として使用された可能性が高い。3は正面右と背面が欠損しているものの3面が使用されている。4は、使用された3面中2面に反りが顕著に認められる。5は流紋岩製の平砥石で、斜方向に僅かに擦痕が認められる。ほぼ平坦で僅かに凹みがみられる。6は、正面と片側面だけが使用され正面は中央が明瞭に凹み、側面にはV字状の溝が認められる。7は、正面と両側面の計3面が使用され、正面縦方向には僅かに凹み溝がみられ、全体が中央に向かって凹んでいる。側面もやはり中央に向かって凹み、さらに右側面には敲打痕が認められる。8, 10は、サイコロ形の砥石で、8は花崗岩製だが別に砂岩製のものも1点出土している。6面すべてが使用され、部分的にわずかな凹みがみられるものもある。9は、正面右側が欠損しているが、断面三角形を呈し、背面以外はすべてに使用されている。最も広い面には2条の凹みがあり、これに向かうように面が顕著に凹んでいる。他に2と同一母岩と思われる凝灰質砂岩製の火

型砥石があり、 $20 \times 15 \times 10$ cm程の大きさを持ち、最大のもので主として筋砥石として使用している。

玉錐 (図版17・18)

玉類の穿孔孔として考えられるものが玉錐である。本遺跡では、磨製玉錐と打製玉錐が出土しており、前者が圧倒的多数を占めている。磨製玉錐は108点出土しており、管玉同様にその未成品も多量に出土している。殆どが安山岩製で、瑪瑙製と凝灰岩製のものが少数みられる。多角柱状を呈し先端には回転痕を有するものがかなりあり、108点中79点に認められ、さらに両端部を使用していたと考えられるものも17点あった。回転痕を有する先端形から以下の6種類に分類できる。

- A類: 丸みのある膨らみを有するもの
- B類: 中心が凹んだ状態のもの
- C類: 平坦になるもの
- D類: 山形に尖るもの
- E類: 平坦面を持つもののやや先細りになるもの
- F類: B類同様に凹んだ中央に小さな突起をもつもの

また、両端を使用しているものの中には、形態がそれぞれ違っているものがかなり存在している。

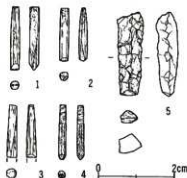
長さは $0.3 \sim 0.8$ cmの範囲に多くが収まり、最短のもので 0.32 cm、最長のものは 1.97 cmであった。直径は $0.13 \sim 0.20$ cmの範囲に多くが収まり、最も細いもので 0.06 cm、太いもので 0.29 cmであった。磨製玉錐の未成品も多量に出土しているが、製作工程は管玉のそれとはほぼ同様と考えられるにも拘わらず、第2工程品の最終段階に属するもの以降の工程品しか出土していない。第3工程の多角柱状未成品の施溝痕は、頭部（短軸方向）に残されている場合が90%以上を占めていることから、縦長の剥片を利用していたようである。

打製玉錐はすべて瑪瑙製で、回転痕を有するものが1点と未使用のものが5点あるほかはすべて未成品である。不整形な角柱状剥片を利用し、押圧剥離によってその一端を細く作り出したもので、先端部の直径は回転痕を有するS-130出土資料の場合、 0.075 cm、先端部の長さ 0.10 cmを測る。

楔状工具 (第21図)

計6点出土している。碧玉製が3点、チャート製1点、安山岩製が1点、凝灰岩製1点である。1～3は碧玉製のもので、3は刃部が欠損している。管玉製作工程の第5工程で得られた角柱状の素材を利用して、一端には $70 \sim 90^\circ$ 程度の刃角を持った刃部を研磨によって作り出し、もう一端部はやはり研磨によって板状に加工して基部としているものである。1は最も整った形状を呈するもので、刃先には僅かながら刃こぼれが認められる。刃先の擦痕は縦方向で使用によるものの可能性もある。

2は、基部の片面に横方向の研磨が認められ、刃部は刃がやや波状を呈し摩滅が認められる。3



第21図 楔状工具実測図

は、刃部が欠損している以外は1, 2の調整法とほとんど同じである。ただ、1と2では刃部と基部の係合に違いがみられる。2が刃部と基部が平行しているのに対して、1ではその係合が90°近くねじれている。

4は磨製玉錐の一端が楔状に加工されているものである。基本的には他の磨製玉錐となんら変わっている点はないが、刃部が明らかに研磨によって作り出されていることは明白で1～3の楔状工具と刃部形態が類似している。他の磨製玉錐には全く見られないことから、一応両者を兼ね備えた工具として扱っておく。

5は、最大であると共に、全体の形状そのものが明らかに他とは異なる資料である。基部側は少し欠損しているものの、ほぼ全体が把握できる。押圧剥離調整によって石錐（ドリル）状の本体が作られているが、片側面は稜が立たず断面は台形状を呈する。やや細くなっている方に横方向の研磨によって刃部が作られている。

形態には差があるものの、両刃で刃部の角度、長さなどはほぼ共通している。

楔状工具計測表

図No	出土遺構	最大長	最大幅	刃部長	刃部幅	刃部厚	基部幅	基部厚
1	S-311	1.67cm	0.22cm	0.16cm	0.21cm	0.23cm	0.07cm	0.20cm
2	S-315	1.39	0.21	0.07	0.20	0.20	0.08	0.15
3	S-281	(1.38)	0.25				0.10	0.17
4	S-154	1.40	0.17	0.11	0.08	0.16		
5	N-1区	(2.16)	0.47	0.11	0.41	0.32		
(6)	S-268	(1.17)	0.33	0.17	0.23	0.31		

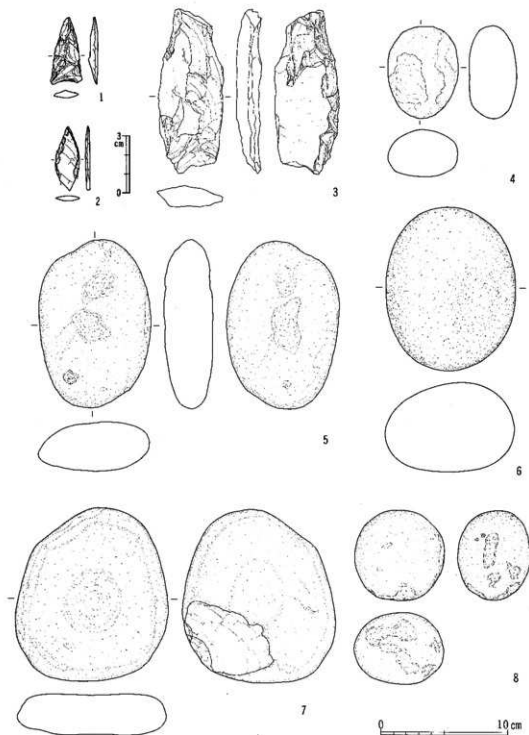
5 有孔円盤状製品 (第22図)

有孔円盤状製品は、石製4点(1～4)・土製10点(5～14)が出土している。

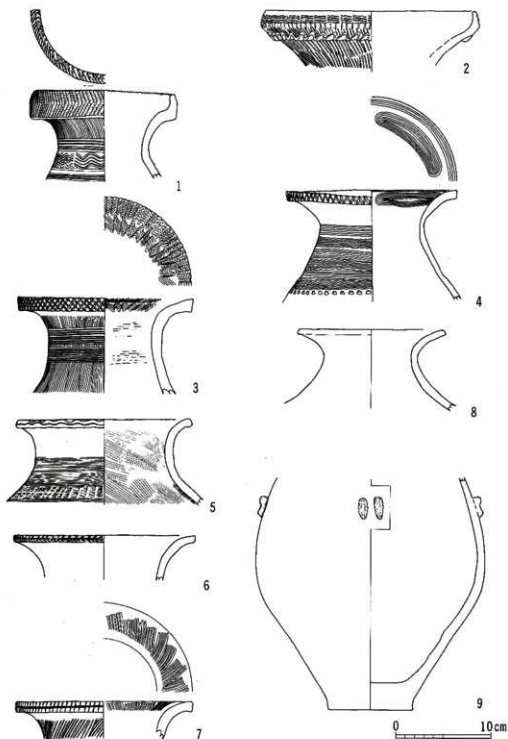
石製のものは全て凝灰質砂岩製で、穴が貫通するもの(2, 4)と未貫通のもの(1, 3)がある。1は直径が約11.2cmで、剥落が著しいが僅かに残る部分をみると表面が滑らかに研磨されていたようである。2は直径が約10.1cmの円形で、断面も整った楕円形を呈している。3は周縁に剥離が顕著に認められ、穿孔面側に平坦面を有する断面が台形状を呈するものである。4は直径が約10.5cmの円形で、穿孔面に平坦面を持ち断面がやや台形状を呈し片側穿孔である。

土製のものは、曲面を残す土器片を利用しており、全て両側穿孔である。5～7は未貫通で、表裏の穴に食い違いがみられる。大きさは、直径最大5.9cmから最小2.37cmを測り、周縁を擦った形跡が残るものは6のみである。

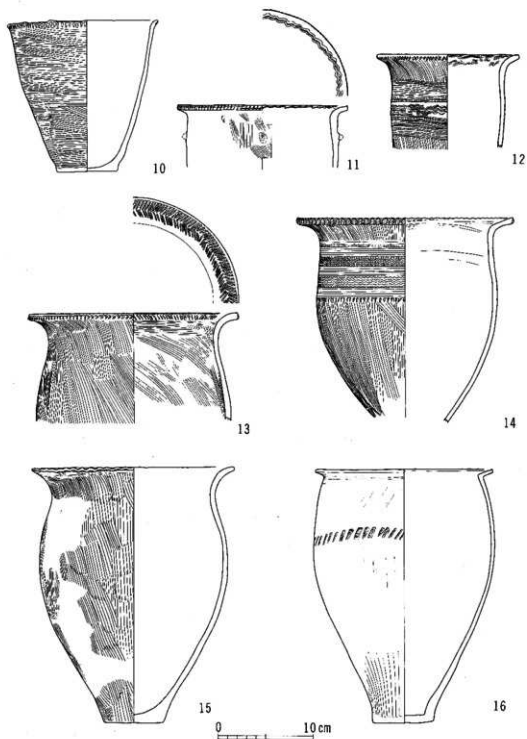
2と土製のものは、紡錘車と考えられる。ただ、あえて玉作りと関連させて考えるとしたら、はずみ車としての使用も考えられる。1と3は用途が明らかではないが、錐の重しとして頭を押さえるときに使用された可能性もある。



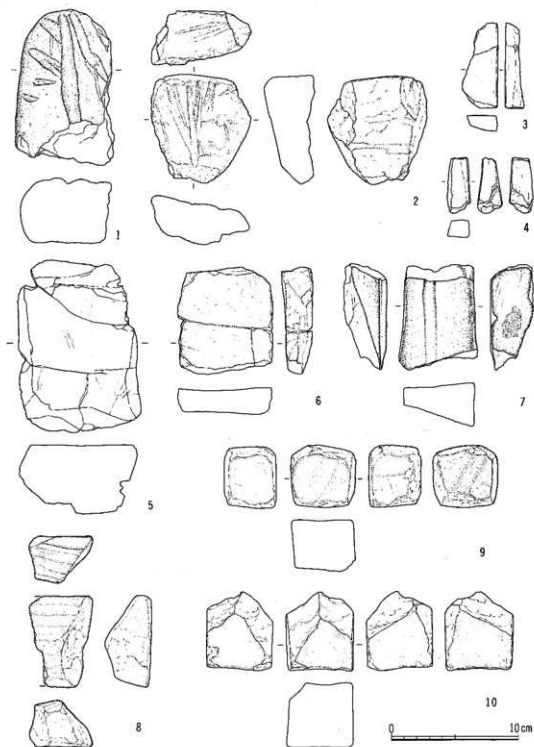
第22图 SD-001出土石器实测图



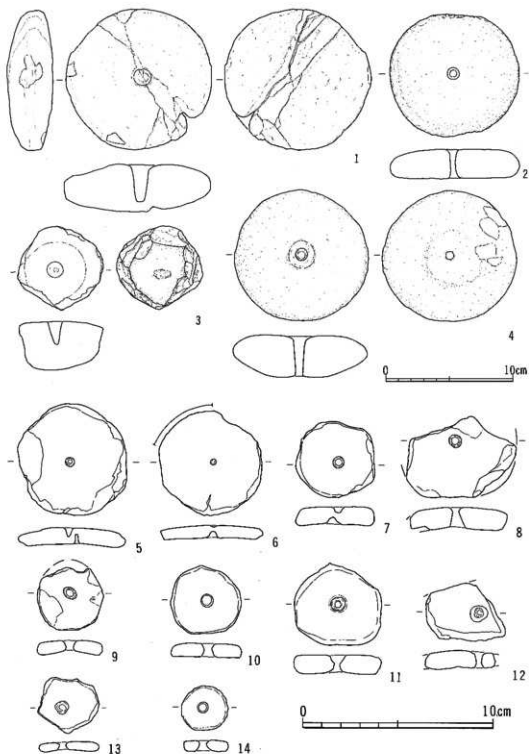
第23圖 SD-001出土土器実測図(1)



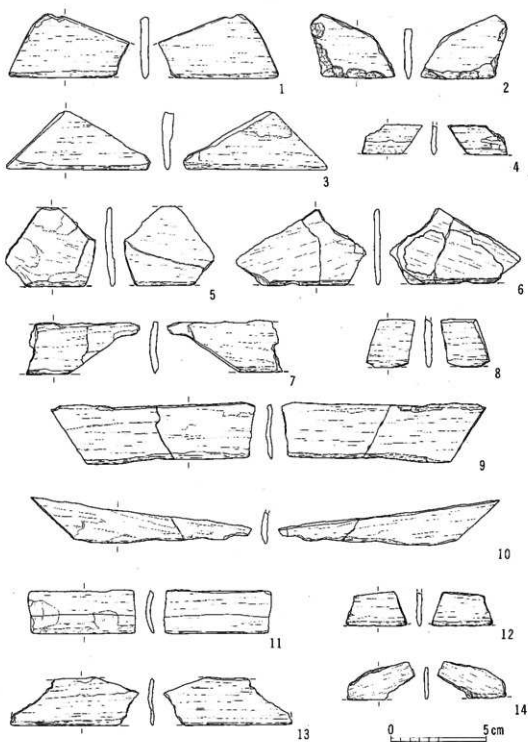
第24図 SD-001出土土器実測図(2)



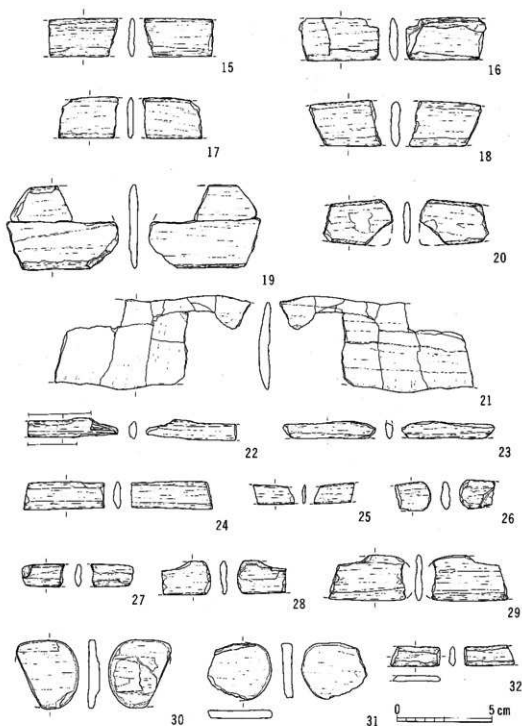
第25図 砥石尖洲図



第26図 石裂円盤(1~4)・土製円盤(5~14)実測図



第27図 玉鋸実測図 (1)



第28図 玉錐実測図(2)

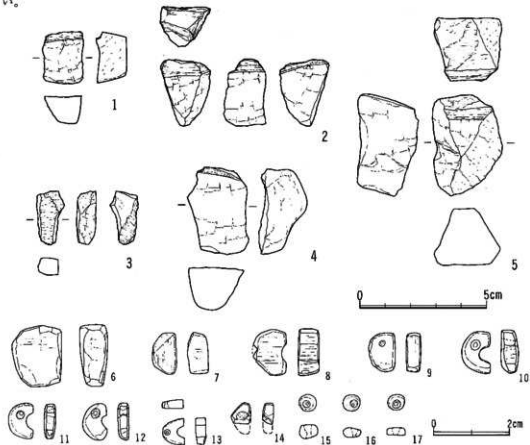
6 玉類

翡翠片 (勾玉・小玉未成品) (第29図)

翡翠片は、原石に近い大きなものが14点、小片が30点、剥片・チップが多数出土している。このうち施溝痕を有するものが大片で4点、小片で7点、研磨痕を有するものが小片で1点ある。翡翠の場合、施溝分割は原石の中の緑色の部分を選んで切り取る際に用いられたと考えられ、小片には緑色の部分が多い。勾玉・小玉の製作工程は、単純にこの小片を研磨調整することで各の玉に加工したと考えられ、出土した遺物からはこれ以上の製作工程を知ることはできない。

勾玉 (第29図)

すべて翡翠製で、未成品が4点、完成品が5点出土している。1～4は未成品で、1は半月形に加工されたもので、剥離面の稜を残すものの、研磨により全体を調整している。2は1と同様に半月形であるが、1よりも滑らかになっている。3は、背部分が一部欠損しているが半月形の腹の部分に横方向の研磨によるU字形のくぼみが入っているもので、4は、半月形の状態で浅く穿孔されている。5～7は完成品で、すべて両側穿孔の平形勾玉で表面に研磨痕を残してはいない。



第29図 翡翠片と勾玉・小玉実測図

8は、ほぼ左右対象のU字形で背部には直線的な面を有し、その中間に穿孔が施される特殊な勾玉である。9は、大半が欠損しているため全体形は不明であるが、復元すると図のように三角形になりやや特殊な形状をしていた可能性もある。これも両側穿孔であるが、穴の直径が他の勾玉に比べて大きいうえ、じょうご状になっていることから穿孔孔の違いを伺わせる。残存部からは腹部にくぼみがあるかは断定できないが一応勾玉に分類しておく。

小玉 (第29図)

すべて翡翠製で、未成品が1点と完成品が5点出土している。10～12は完成品の内の3点で、全体に丸みを帯びるが穴は中心からずれており、ややいびつな形をしている。未成品を見ると翡翠小片に研磨調整を加えただけであり、研磨によって丸く整形された後に穿孔しただけのものと思われる。12は下半が欠損しているが、いずれも両側穿孔である。

管玉と管玉未成品

本遺跡では、多量の碧玉片が出土している。そのほとんどが管玉製作にかかわる遺物で、完成品も含め全工程を7段階に分けることができる。また水洗の結果得られた多量のフレイク・チップもあり、多くの情報を得ることができた。以下、各工程毎にその代表的なものに限って説明していくことにする。

原石

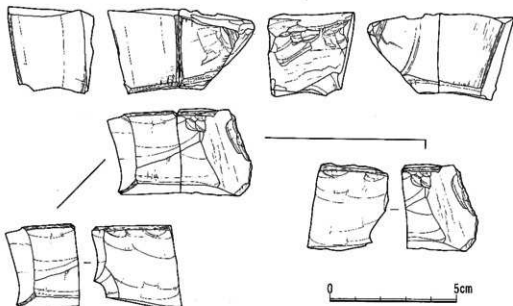
産出地から持ち込まれた原石の段階である。玉材原石として最大のものは図31-1で、長さ15.32cm、幅10.8cm、厚さ5.5cm、重さ1.3kgを測り、4面に自然面を残している。3～4個所削り取られているが、ほぼ持ち込まれた状態に近いものであろう。このほかに、玉材としては不適ではあるが約20×15×10cmを測る緑色凝灰岩が出土している。大きなものはこの程度から、小さいもので10cm角のものが原石として持ち込まれていたようである。出土地点は、北側の5・6区に集中している。

第1工程品

原石から打撃、施溝分割、研磨などにより、平坦面を持つ石核に整形する段階である。施溝痕のみを有するもの(図31-2, 4, 6)、研磨痕のみを有するもの(図31-3, 5)、両方を有するもの(図31-4)がある。この段階での施溝分割は、平坦面に施溝されるとは限らず、角に施溝される場合が少なくない。(図31-2, 6・図32-1)これは、平坦面を結果的に作出することが目的であるからで、平坦面を利用するより作業量が少なく済む利点もあったからであろう。ただし、角に施溝する場合にも敲打痕により角を潰すような調整もみられる。

第2工程品

前段階により得られた石核の平坦面を利用して、施溝分割を繰り返すことで直方体を作出していく段階である。図30は、工房址内ビット(S-369)より出土した接合資料である。5回目の施溝分割によって半載され、一辺約3cmの立方体を作っている。この段階はその進行状況により、板状を呈するもの(図32-8・図33-2～4, 6, 7, 9, 10)、断面正方形になるもの(図33-2～7, 9・



第30図 S-369出土管玉未成品接合資料実測図

図33-1, 5, 8)に分かれる。図33-3は板状剥片の研磨を施した側面から施溝分割した面に2本の平行する施溝痕を有するもので、裏面にも研磨が施されている。一見、いわゆる大巾湖技法として知られている板チョコを順に削り取っていくように施溝分割する方法に似た資料であるが、この種の技法の場合、研磨により平たい板状にするのが普通であること、本遺跡ではこの1点のみであることなどから、板状→角柱状→板状と繰り返されるこの段階の最終段階の一群の資料の1つと考えた方がよいであろう。

第3工程品

前段階によって得られた角柱状未成品を調整加工していく段階である。この段階は、押圧剥離または研磨によって、より小さな整った4角柱に整形していく。図33-11・13-17は押圧剥離調整を施したもの、図33-18-23は研磨調整を施したものである。各の調整法は、初期では別々に独立して存在しており、幅5-10mm大のものを図34のような幅3mm大の未成品段階まで調整していく

第4工程品

研磨調整により多角柱状未成品を作っていく段階である。それを示す資料としては図34-1-37のような研磨痕を有する多角柱状未成品である。1-9は、長細く両端面が凸凹している状態のもので、10-37は両端面が研磨調整により平坦に加工され、10-14の大型品を除けば10mm以下の小さいものが大半を占める。前者から後者へは工程の進行を示している。稜の角数も基本的には後者の一群に進むに従って増加しているが、必ずしも4角→8角→16角といった規則性はなく、素材に応じて稜を研磨していき、円柱に近くしていくものであろう。研磨痕は左下がりの斜方向がほとんどで縦方向、右下がり斜方向も僅かにみられる。

第5工程品

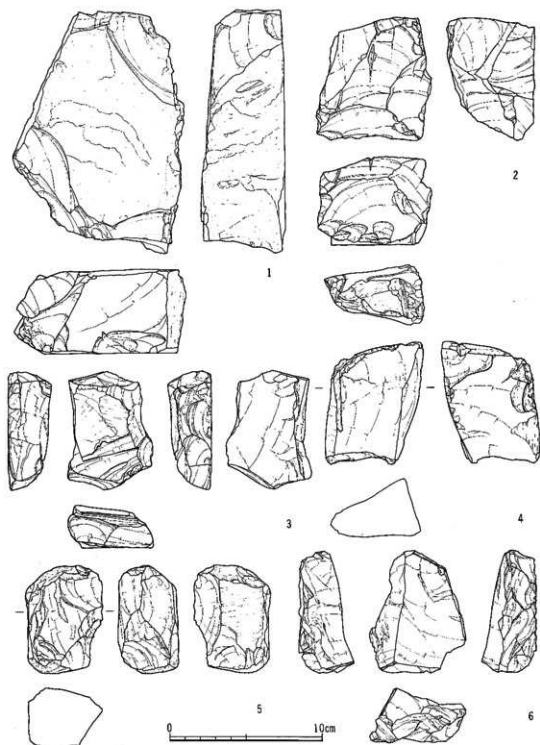
多角柱状未成品に穿孔を施す段階である。図35-38-53に示したような、穿孔途中のもの、貫通しているものの稜を残しているものが、この段階を示す資料である。38-40, 43, 44は、端面にわずかな凹みを持つもので、41, 42, 45, 46は片側を中程まで穿孔しただけでもう一方は浅い凹み程度に止どまっているものである。穴の先端は、凹み程度のものはU字状であるのに対し、中程まで穿孔したものは周縁がより深く凹む型を呈するものが多い。47, 48は木貫通であるが、貫通しているものと勘違いしたらしく、表面は仕上げ磨きが施されている。49-53は、貫通しているが稜を残しているもので最終の仕上げが施されていないものである。

第6工程品 (第35図)

管玉の完成品である。49-53のように稜を残したものを磨いて、54-77のような円柱形の管玉に仕上げていく。完成品には研磨痕が見られず、光沢を有するものが殆どであることから、砥石以外の仕上げ方法があった可能性もある。54-57のような長いものは少なく、4-7mm程度の長さのものが大半を占めている。殆どが両側穿孔であり、片側穿孔とおもわれるものでも補助的に他方から穿孔が加えられているものが多い。両方の穴が食い違うものもあり、失敗品の中にはそれが起因して半分に割れたと思われるものもある。この内面には螺旋状痕がみられ、錐の出し入れの際についたと考えられる縦方向の痕跡も認められるが、一定方向の回転によるか錐のみ式の回転によるかは判断し兼ねた。

その他の碧玉製玉類 (第35図)

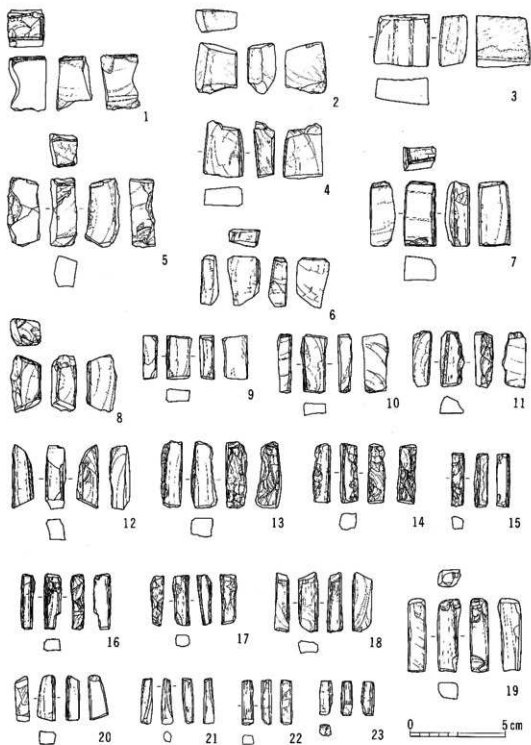
78は垂飾玉で、下端部を除いて全面に研磨が施されている。隅丸の台形を呈し、広いほうに穿孔されている。両側穿孔であるが、ほぼ片側穿孔で貫通しており片側は補助的なものである。79, 80は角柱管玉で、全面に研磨痕を有し端部には施溝痕の名残がある。片側穿孔で、穴の内面は管玉に見られるような螺旋状痕がなく、光沢を有する程に磨かれている。第3工程の角柱状未成品の研磨調整品から作られたものであろう。81-83は、管玉ではあるが穴が筒状に貫通しているのではなく、両端に近い部分にV字状に切り込みを入れることにより貫通させているものである。端部からの穿孔の先端部と切り込みの先端は一致していることから、切り込みを入れた後に端部から穿孔したものと考えられる。表面には稜が一部に残っており、普通の管玉ほど丁寧な仕上げがなされなかったようである。



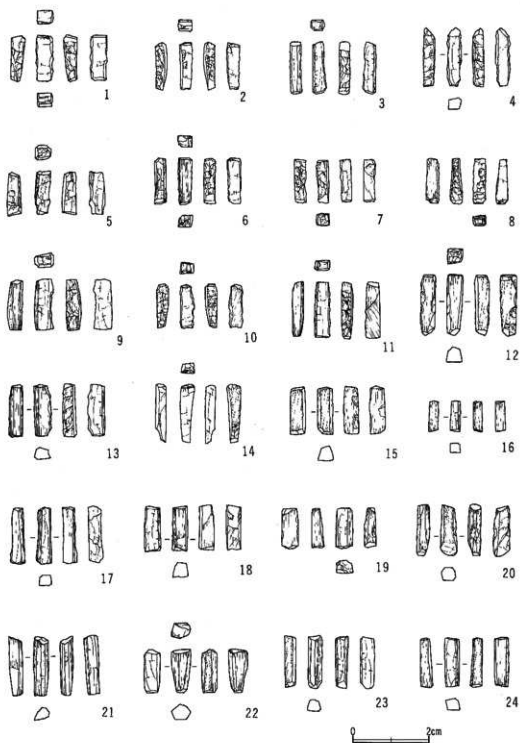
第31圖 管玉未成品（原石・第1工程品）実測図



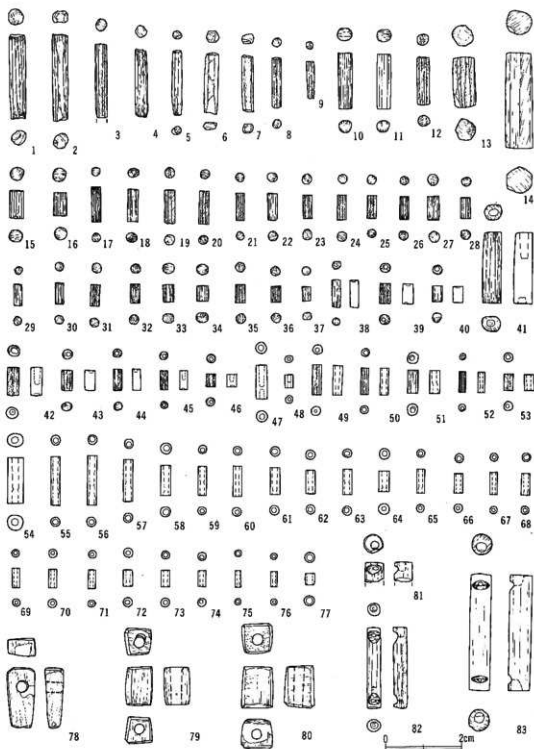
第32図 管玉未成品（第2工程品）実測図



第33圖 管玉未成品 (第2工程品・第3工程品)



第34図 管玉未成品（第3工程品）実測図



第35図 管玉未成品 (第4～6工程品)、その他の管玉実測図

第V章 総括

1 遺構について

下屋敷遺跡の足掛け2年にわたる調査で検出された遺構のうち、性格を明らかにすることができたものは、玉作り工房址と考えられる住居址1棟にすぎない。他の250基余りの大小様々な土坑群は、玉作りに関係するもの、土墳墓などが混在しているものと考えられるが、個別にそれを判定できなかった。しかし、その配置には集落構造を考えるうえでヒントとなりうる特徴が幾つかある。

第一点は、本遺跡に特徴的な土坑である大形の溝状土坑の配置である。調査区西側ではSD-001に直交するように北東～南西に延び平行して3列に並んでいるのに対し、東側では北西～南東に延び、工房址から見るとやや放射状に広がっているように見える。これらが有機的なつながりを持っていたものであるかどうかは、各遺構間の遺物の詳細な分析が必要である。土器を中心に未整理の部分はまだあるため、今後の課題としておきたい。

第二点としては、SD-001と他の遺構との関係である。SD-001は、南側で途切れているが、削平の関係で消滅した可能性も高く、当時はもっと南東に延びていたものと思われる。とすると、遺構はSD-001と北側湿地帯とに挟まれた地区にほとんどが入ることになる。SD-001は、環濠と呼べるほどの規模はないが、集落を区画する意味は確実にあったといえ、集落域は東側にもう少し広がり、北側湿地帯と挟まれた半円形を呈したものであったと推定できる。

玉作り工房址とした住居址は、類例が新潟県下谷地遺跡にみられ、石川県寺中遺跡の「半環状に連なる土坑群」と報告されているものもそれに該当すると思われる。下谷地遺跡では、6棟の住居址のうち5棟に周溝がみられ、いずれも1本の周溝というよりも土坑が連なって周溝状を呈しているものである。その内側には小ピットが並び、中央に浅い土坑が存在している。規模は第2号住居跡が最大で、周溝が二重に巡りその外径で約18m、内径で約13mとされている。これは本遺跡の住居址とほぼ同規模であり、極めて似た状況といえる。寺中遺跡の場合は、土壌草群として報告されているが、おそらく同様の周溝であり、半円の内側にピットが存在している点からも住居址の一部と考えて間違いのないだろう。

この種の周溝について、下谷地遺跡では低い地点に位置する住居址に顕著に認められ、高い位置のものには周溝が存在しない点などから、湿気を除くためのものであろうと推定している。しかし、土坑を連ねたような周溝にする意味を説明するものではない。かといって本遺跡のように後世に削平を受けた遺構から判断することは、危険性が高いことも事実である。そこで、両遺跡の共通性を考えると、弥生時代中期の玉作り遺跡であるという点で一致する。本遺跡の周溝には、単なる遺棄の結果とは考えにくい遺物の偏在がみられる。湿気を除く意味を否定するものではないが、弥生時代中期の玉作りに深く関係した住居址の一つの形であると考えたい。同時期の北陸地方における集落の実態はまだ不明な点が多く、今後同様の資料が増加していくことを期待した

い。

2 土器について

土器については、整理作業中である関係で本書では多くを述べることはできない。詳細は整理終了後に譲り、銅鐸鋳型との関係でSD-001出土のものを中心に概要をまとめておくことにする。SD-001出土の土器を見る限り、そのバラエティーは、遺跡全体のそれに比べて乏しいといえる。壺形土器には、典型的な条痕文系のものは少なく、櫛描文系がほとんどである。これらは、畿内第Ⅲ様式に並行するものが多いと考えられるが、図23-1のように口縁下端に押圧を施すような施文方法は、北陸では柴山山村Ⅱ式あたりからみられ、東海系の条痕文系土器（岩滑式）の影響を強く受けたもので、量的にはそれほど多くはないが他に何片もあり、他の遺構からは岩滑式に比定できる口縁部片も出土している。ただし、この土器の場合は頸部以下の調整が典型的な条痕ではなく、荒いハケによるものである点が特徴である。

壺形土器では、器形から分類すると口縁がゆるやかに外反し、胴部に張りがみられ口縁部径を越えないタイプのもの（A類）、胴部に張りをほとんど持たず、頸部から口縁部にかけて大きく外反するもの（B類）、胴部の張りがなく口縁部のみがわずかに外反するもの（C類）の3タイプに分けられる。量的にはA類が最も多く、ハケ調整を施されるだけで施文されることがほとんどない。B類は、胴上半部に口縁内面に櫛描の波状文、平行線文、簾状文が施される。C類は量的にはわずかで、復元できたものは図示した1点のみである。横走する条痕文で表面調整を施している。口縁端部の刻みはA～C類すべてにみられる傾向で、共通した特徴のひとつであるといえる。

次に時期を考えることにしたいが、その前に溝内の遺物の出土状況に触れておく必要がある。溝は最深部で約0.4mを測るが、上層と下層で土器の出土状況、内容に大差を見いだすことができなかった関係で、すべてを一括して扱ったが、一括資料として同時期の所産として扱えるかどうかには疑問が残るため、ある程度の時間幅を念頭におく必要がある。

とにかく、SD-001では系統の違う条痕文系土器と櫛描文系土器が混在している状況が看取できたわけであり、遺跡全体でも同様の傾向がみられた。弥生時代前期～中期の北陸地方では、東海との深い係りが認められる柴山出村式に代表される条痕文系土器群と、小松式に代表される畿内の影響を受けた櫛描文系土器群が知られており、前者から後者へという時間的な変遷としてとらえられてきた。ところが近年石川県吉崎次場遺跡、矢木ジワリ遺跡などで、条痕文系土器と櫛描文系土器が共存する土器群の存在が指摘され、その間を埋める段階として位置付けられるようになってきた。本遺跡も基本的にはこの時期に属するものと考えて間違いないと考える。さてこの時期が他の地域と対比させた場合、どの段階にあたるかものであろうか。矢木ジワリ遺跡では、柴山出村式を畿内第Ⅰ様式新段階併行、小松式を畿内第Ⅲ様式併行と比定し、そのどちらとも違う点から畿内第Ⅱ様式に併行するものとして位置付けている。さらに、吉崎次場遺跡N-2土坑の資料との比較により第Ⅱ様式併行内での細分の可能性も指摘している。

本遺跡の資料は、矢木ジワリ遺跡の資料と比較した場合、条痕文系土器の割合が低く、凹線文

が存在しない点、甕形土器の口縁内面に僅かだが刺突文、波状文などで飾る手法が存在する点から考えると、やや新しい印象を受ける。詳細な分析をしていない段階で判定することには無理があるが、矢木ジワリ遺跡と小松式との間に位置する段階であるといえ、畿内第Ⅲ様式の初頭あたりに併行するものが主体を占めると考えている。しかし、地域性も考慮に入れねばならず、今後の土器整理、分析の中で明らかにしていきたいと考えている。

3 銅鐸鑄型について

銅鐸鑄型としたものは、その掘り込みの状況、材質から考えても銅鐸鑄型として間違いないと思われる。鐸身部のみの掘り込みだけで製作を中止されている関係で、型式を断定することはできない。ただ少なくとも米ヶ脇出土銅鐸、井ノ向出土銅鐸とは明らかに違う、小型の銅鐸であることは確かである。銅鐸分布圏の最北端での出土であり、文様や紐が掘られていない点、裏面を砥石として使用している点、これに関連した遺物が存在しない点などから問題点の極めて多い遺物であるとはいえる。

砥石として使用されている裏面は、それがかなり長期に渡って使用されたことを示すように、平坦で両端に向かってかなり反りが認められる。銅鐸の製作は、初期の段階で中止されていることから、本遺跡においてはたして銅鐸の製作が行われたかどうかには確かに疑問が残る。しかし、砥石として持ち込んだものであったとしても、その石材が必ずしも貴重なものではないことから考えれば、遠距離を運んだとは考えられず、本遺跡も含めたこの近辺で銅鐸の製作が行われていた、あるいは行おうとしていた可能性は高いと言えよう。このことは、銅鐸の持つ意味と銅鐸製作との関係という意味で大きな問題を提起したといえよう。

4 玉作り関係工具について

玉鐸

名称については、従来、「石鋸」（せっきょ）と称されることが多かったが、縄文時代にみられる「石鋸」（いしのこ）との混乱を避けるため、玉作りにほぼ限定して使われる擦り切り工具であるという意味で「玉鋸」（たまのこ）と呼ぶことにした。

刃部を有する100点余りの玉鋸の内、完形品といえるものは極めて少なく、その破損率が高かったことが伺える。遺存状況が良好な資料から判断すると、刃部が片刃のみに付けられているもの（Ⅰ類）、両辺に付けられているもの（Ⅱ類）に大別できる。Ⅰ類は、素材がわずかに反り、刃部の作出が顕著ではなく片刃状になる場合が多い。これに対しⅡ類は、素材の反りがなく、刃部の作出が顕著で両刃状になる。両辺の間は凹み断面形はⅡのような形態を呈する場合が多く、端部は丸く面取りされるものがみられる。大きさは、Ⅰ類が比較的一定しているのに対し、Ⅱ類はかなりバラツキがみられ、特に小型品が特徴的に存在する。

このような差が、機能的な意味を持つものであろうか。施溝痕を観察すると、第1～2工程品の大きな碧玉片に遺されたものと、第3工程品に遺されたものとは明らかにその幅、深さに違

いが認められ、前者にはⅠ類の大型品を、後者にはⅡ類の小型品を使用した可能性はある。だが、大は小を兼ねることはありうるから、必ずしも使い分けがされたとは断定できない。また、原材料である結晶片岩が現地調達できるものではなく、和歌山県あたりから運んだ可能性が高いことから材料の有効利用をはかった結果、小型で両辺に刃を持つものが出来上がったとも考えられよう。

砥石

今回出土した砥石の内、凝灰質砂岩と石英安山岩は砥石としてはかなり柔らかく、碧玉や翡翠といった硬度のかなり高い石の砥石としては不適切とも思える。しかし、これらは筋砥石として利用されている場合が多いことから、玉の仕上げ用砥石であったと考えられる。また、玉鋸でつけられたような断面V字形の細い溝も多くみられることから、玉鋸、玉錐の研磨用に使われた可能性もあるといえる。砂岩製・花崗岩製のものは、筋砥石と平砥石が兼用されているものが多く、筋砥石としての溝の断面はU字形を呈する。玉作りに限定して考えた場合、荒砥石として工程の早い段階で使用されたものであろう。

玉錐

石製玉錐に関しては、鳥取県長瀬高浜遺跡から出土した玉削製の打製玉錐が従来から知られていたが、近年の調査で下谷地遺跡、本県の吉河遺跡で磨製玉錐が出土し、大阪府八雲遺跡からは打製玉錐が多量に出土して、ようやくその実態が明らかになり始めたばかりである。打製品と磨製品は、今のところ時期差であると考えられる。長瀬高浜遺跡が弥生時代前期、八雲遺跡が中期初頭であるのにたいし、下谷地遺跡は中期中葉にあたることから、打製玉錐→磨製玉錐という発展段階として一応とらえることができる。石材にも明らかな違いがあり、打製品は玉髓・瑪瑙・鉄石英などであるが、磨製品は安山岩系の石である。本遺跡の場合は、瑪瑙製の打製品と安山岩製・瑪瑙製の磨製品が共存しているが、磨製品が圧倒的に多く主体が磨製品であったことは間違いない。

磨製品は、先端の形態で6種に分類できたが、その割合はA類とB類で約7割を占める。これらの形態差は使用結果によるものなのか、元来別々の形態を持っていたものであろうか。そこで、管玉の穿孔途中で廃棄された未成品を観察してみると、U字形に凹むものと周縁が深く凹むものはほぼ半々であったが、前者は浅く凹む程度のものに、後者は玉の中程まで穿孔されたものに多くみられる傾向があった。これをもって、この形態差を説明することはできないが、本穿孔とやや凹みをつける予備穿孔といえるようなものがあり、予備穿孔の際にA類やD類のような尖ったものを使用し、本穿孔の際にB類を使用した可能性もある。ただ、下谷地遺跡の例では深さと凹みの状態に関連性は認められず、今後資料の増加をまって判断したい。

楔

施溝分割を行う際に、楔を使用する可能性については、以前から考えられてきたが、具体的に呈示した例は少ない。下谷地遺跡では、楔形石器をそれにあてている。本遺跡では楔形石器が出土していないが、棒状の楔状工具が存在している。片刃であれば石鑿といえるが、両刃であるこ

とから楔とした。施溝された溝にあてると、その角度・幅とも楔の刃と一致した。さらに、S-369出土の管玉未成品の接合面を観察すると、2点の打点が確認できその部分の上端にはわずかな欠損がみられた。2本の楔を台に装着して、同時に打撃を加えたと考えればこの楔を利用することと矛盾しないことが判明した。

しかし、問題点も少なくない。まず、棒状であることは打撃を加える工具としては強度面で弱点がある。それを犠牲にしても、小面積に力を集中させることに有効性があつたからであろう。もう1つは、他の工具に比べ絶対量が少なすぎる点である。はかに何か「楔」として使用していた工具が存在していたと考えられるが、それがどのようなものであるかは明確ではない。玉鋸もその候補ではあるが、棒状楔状による「点」打撃と玉鋸による「線」打撃とでは技術的に差が大きく疑問が残る。今後資料の増加を待たねばならないが、実験なども含めて確認する必要がある。

5 管玉製作工程について

本遺跡から出土した碧玉片、管玉未成品は、管玉の製作工程を知るに足る量と質がある。紙面の都合上、詳細にわたる分析は今回はできないが、大局的に見た下層敷遺跡において管玉の製作工程について考えてみたい。

原石

まずは原材料（原石）の採取段階である。本遺跡の碧玉がどこに産するものであるかは、まだ確認できてはいない。本書では玉材である緑色の石を一括して「碧玉」と称しているが、多くは緑色凝灰岩で、本来の意味での「碧玉」は多くはない。おそらく、原石採取の際には「碧玉」を含む緑色凝灰岩塊ごと採取し、その中で玉材として使用可能な部分のみを利用したと思われる。日本海側にはグリーンタフと呼ばれる緑色凝灰岩層がみられ、この種の石が各所で産出すると言われている（実際に露頭として知られているものは少ない）。本遺跡の近辺では、従来より知られてきた露頭としては、石川県江沼郡山代温泉の大聖寺川上流が知られている。これは、竹田川上流に遡れば山1つ裏側に当たる。ここから持ち込んだか、あるいは竹田川上流に別の露頭があるかは明確ではないが、原石の多くが北側湿地帯付近に集中することも考え合わせると、水上交通で利用して運んだ可能性は十分考えられる。

大きさとしては、それほど大きなものを必要とはしなかったであろうから、10cm角大のものが多かったと思われるが、最大では20cm角、2kg以上もある大きな物も持ち込んでいることから産地がかなり近いことをうかがわせる。

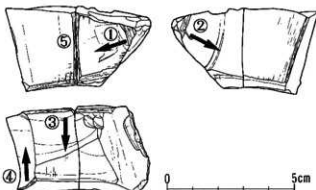
第1工程

一般には、「荒削り段階」と称される段階である。本遺跡の場合、施溝分割・打撃・研磨のどれを利用していても、あくまで平坦面を作出することを主目的として行っており、言い換えれば石核調整段階であるといえる。つまり、施溝分割による直方体を作出していき、次ぎの段階での効率を高めるための打面調整を行ったものである。ただし分割された場合、ネガティブ面でもポジティブ面でも平坦面が得られるわけで、大きく残された石核のみが利用されたのではなく、小

さく割り取られたものは剥片として、第4～5段階あたりまで飛び越して利用されたようである。この種の不定形な剥片がかなり多いことから言えよう。

第2工程

第2工程によって得られた石核の方を、施溝分割によって直方体を作出する工程で、2分割→4分割→8分割というように、徐々に小さな直方体にし、最終的に四角形柱にしていくものである。この工程を良く示す例が工房址ピット内から出土している。この接合資料を観察してみよう。図36のように計5本の施溝痕が残っている。これらの切合いから想定した作出順は図示したように、まず敲打痕のみられる正面右

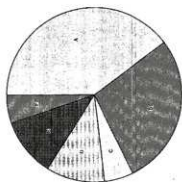


第36図 施溝分割順序例 (S-369出土接合資料)

に、まず敲打痕のみられる正面右側の角の部分を両面でほぼ平行するように施溝分割している。これは第2工程に相当するが、角の敲打痕も一種の打面調整と考えられる。次にやや板状を呈していたものを角柱状にするように、側面を割り取る。次に①②で分割した打面对面側を②によって得られた面を施溝して分割し、最後に①によって得られた面から施溝分割して立方体を作出している。この例を見ると、板状直方体→立方体→板状直方体といった具合に小さくしてある程度の大きさまでなっていくものと考えられる。次の角柱状未成品を作出する方法として、単純に施溝分割を繰り返すことで、結果的に角柱を作り出している。1点だけではあるが、板状剥片から連続して施溝分割しようとしているものがある(図34-3)。しかし、本遺跡の場合それが常時行われた技法であると思われない。だが、角柱状未成品に残されている施溝痕を観察すると、長軸方向に残されている例が全体の約70%に達する。このことは、板状の未成品の広い面に施溝され分割された横長剥片を多く使用した結果的であることを示している。一方、玉錐未成品の場合は、短軸方向に施溝痕を残した縦長剥片がほとんどであるのとは、全く対象的である。

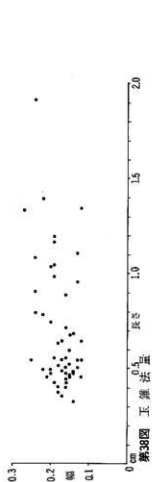
第3工程

四角柱状の未成品を加工していく段階である。これには押圧による場合と、研磨による場合があり、得られた剥片の状況によって使い分けられたようで、両者は基本的には合い入れない。大きさが5～10mm大のものがこの段階を示し、最終的には3mm大のものに仕上げている。第4工程が2系統に分かれる点は、下谷地遺跡でも指摘されており、研磨と押圧剥離調整はうまく使い分けられていたと考えられる。ただ、3mm大になった段階で、両技法は併用され多角柱へと加工されていくものである。

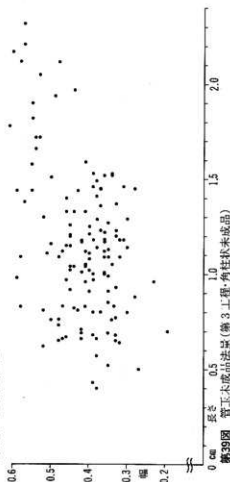


A	B	C	D	E	F

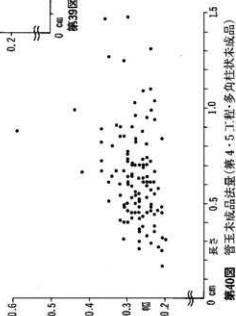
第37図 磨製玉簪先端形状と出現率



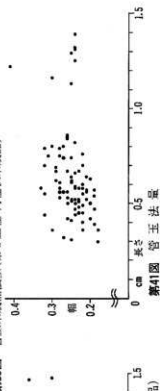
第38図 玉簪法量



第39図 管玉未成品法量(第3工程・角柱状未成品)



第40図 管玉未成品法量(第4・5工程・多角柱状未成品)



第41図 管玉法量